

思考と技術と対話の学校
「言葉を紡ぐ」「体験を紡ぐ」

2017

アサダワタル
荒田詩乃
小川 希
小高日香理
影山裕樹
加治屋健司
川瀬一絵
「コロカル」編集部
笹川尚子
佐藤 悠
鈴木一郎太
嶋田昌子
多田智美
長島 確
中田一会
羽原康恵
藤 浩志
松田雅代
三宅航太郎
嘉原 妙
L PACK,
森 司
坂本有理

アートプロジェクトを紡ぐ

— 伝える・ひらく・つなげるためのヒント集



思考と技術と対話の学校
「言葉を紡ぐ」「体験を紡ぐ」
2017

アサダワタル
荒田詩乃
小川 希
小高日香理
影山裕樹
加治屋健司
川瀬一絵
「コロカル」編集部
笹川尚子
佐藤 悠
鈴木一郎太
嶋田昌子
多田智美
長島 確
中田一会
羽原康恵
藤 浩志
松田雅代
三宅航太郎
嘉原 妙
L PACK.
森 司
坂本有理

アートプロジェクトを紡ぐ

— 伝える・ひらく・つなげるためのヒント集

ARTS
COUNCIL
TOKYO

装画・挿画：蓮沼昌宏



アートプロジェクトを紡ぐ

—— 伝える・ひらく・つなげるためのヒント集





坂本有理 「思考と技術と対話の学校教頭」

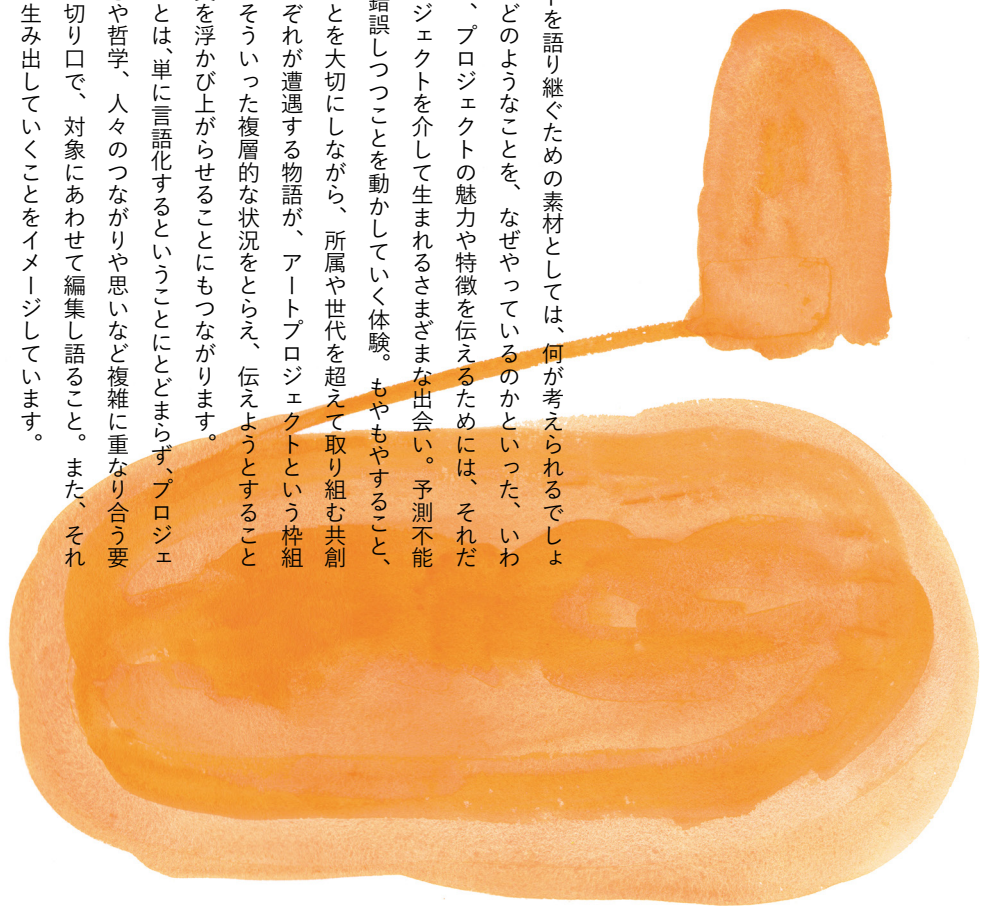
「アートプロジェクト」を伝えるのは難しい。プロジェクトの取り組みや魅力をどのように他者に伝え、届けることが可能か。そんな問いから、2017年度の「思考と技術と対話の学校」連続講座「言葉を紡ぐ」体験を紡ぐ」ははじまりました。7ヶ月にわたり、アートプロジェクトの運営者、アーティストや編集者、ライター、ツアーガイドの方々と紡ぐ実践者とともに、「アートプロジェクトを紡ぐとは？」について考え、向き合う時間を持ちました。本書はそれらの講座のエッセンスを抽出しまとめた「紡ぐ」ためのヒント集です。

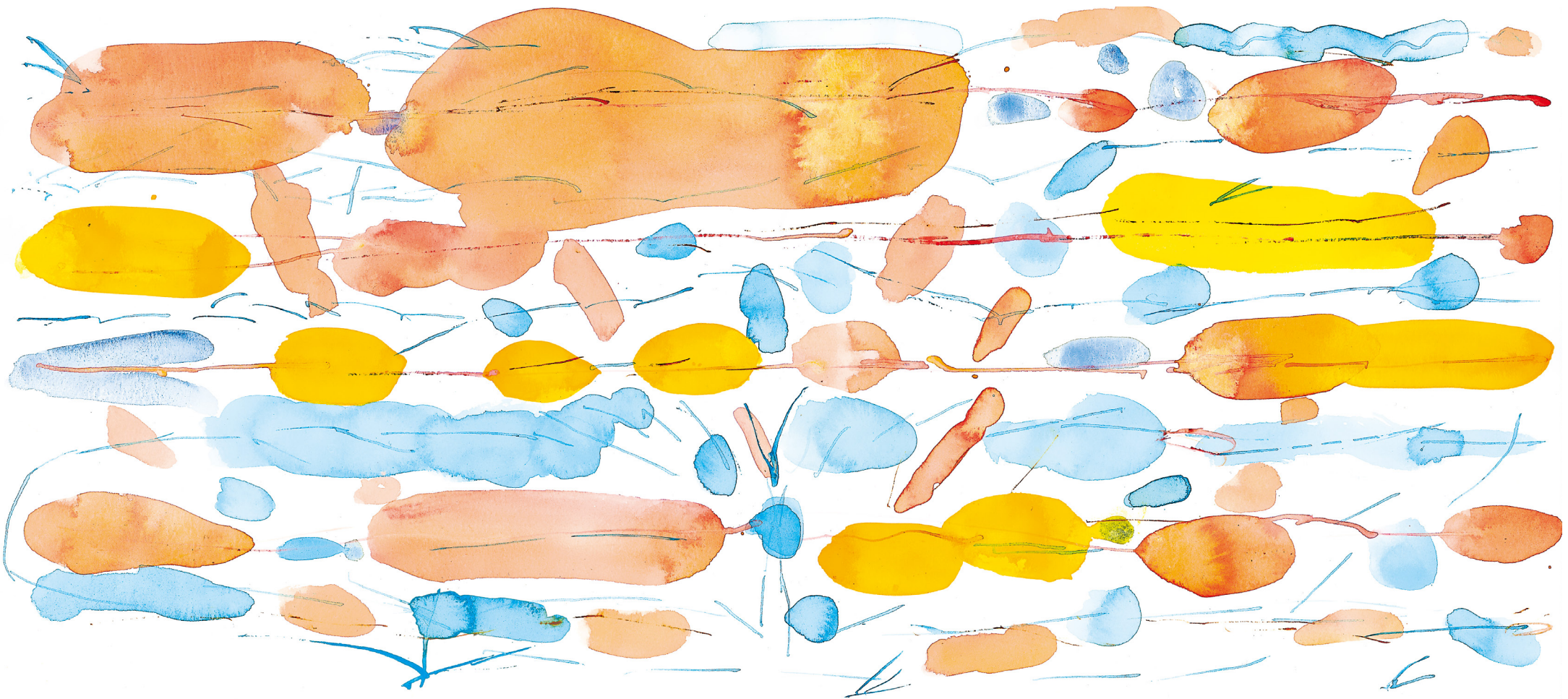
「思考と技術と対話の学校」でテーマとするアートプロジェクトとは、既存の価値や枠組みにとらわれず、アートの手法を用いながら、挑戦や実験をおして、いまだ見ぬ何かを生み出そうとする試みのこと。価値として認識される以前のもの、つまりは言語化、ビジュアル化されていない段階のものを丁寧にすくいとりながら、さまざまな人の手によって形づくられる取り組みといえます。展覧会、パフォーマンス、報告会といったようなアウトプットがすべてではなく、むしろそこに至るまでのプロセスにおいてどのように活動が育まれていったのか、どのような問いや気づきと向き合っていたのかということがプロジェクトの価値をとらえるうえで、重要な要素となります。そして、アートプロジェクトは、携わる人々が意識的に語り継いでいかないと、残っていかないものでもあります。



そうしたアートプロジェクトを語り継ぐための素材としては、何が考えられるでしょうか。いつ、どこで、だれが、どのようなことを、なぜやっているのかといった、いわゆる基本情報はもちろんですが、プロジェクトの魅力や特徴を伝えるためには、それだけでは十分といえません。プロジェクトを介して生まれるさまざまな出会い。予測不能な展開に身をおきながら、試行錯誤しつつつことを動かしていく体験。もやもやすること、答えがないこと、わからないことを大切にしながら、所属や世代を超えて取り組む共創的活動の様子。携わる人々それぞれが遭遇する物語が、アートプロジェクトという枠組みのなかで生まれていきます。そういった複層的な状況をとらえ、伝えようとするのが、各々のプロジェクトの本質を浮かび上がらせることにもつながります。

アートプロジェクトを「紡ぐ」とは、単に言語化するということにとどまらず、プロジェクトや作品の根底に流れる思想や哲学、人々のつながりや思いなど複雑に重なり合う要素をほどこきながら、さまざまな切り口で、対象にあわせて編集し語ること。また、それらのことにもふれる機会や体験を生み出していくことをイメージしています。





紡ぐための準備運動

連続講座では、アートプロジェクトの仕掛け手やアーティスト、研究者などの出会いをおして、アートプロジェクトを多角的に読み解くところからスタートし、アートプロジェクトを語るうえでの引き出しを増やすため、さまざまな事例にふれ、紡

ぐ実践の際は、「どんな立場で」「何のために」紡ぐのかという前提を設定しながら、紡ぐための多様な方法を検討しました。実際、アートプロジェクトは紡ぐ素材の宝庫です。アーティストからの問いかけにはっと心を揺さぶられる瞬間。プロジェクトをおして得た気づきや変化。携わる人々の熱量。そういった情景や情感も思い浮かべながら、紡ぐことと向き合います。日々意識しないと零れ落ちてしまうようなエッセンスを拾い集めることが紡ぐための一歩。他者に向けて、または他者とともに紡ぐには、どんな方法が考えうるのか。紡ぐ相手や状況を思い浮かべながら想像をめぐらせました。



語る場がより豊かになるように

アートプロジェクトの現場では、やることに手一杯で、伝えることについては、なかなか手がまわらないことも多々あります。やると同じくらい、語り継ぐにはエネルギーが必要です。人手もコストもかかります。でも語り伝えることで、プロジェクトが広がり、価値化されたり、仲間が増えたりと、成長につながることも。まちのあちらこちらで、アートプロジェクトが語られるようになりプロジェクトについて考えたり、深めたりするような状況がぼつぼつと生まれていく。そんな風景を想像しながら、現場で活躍する「紡ぎ手」がじわじわと増殖していくことに期待しながら、「紡ぎはじめ」の記録をお届けします。

002	アートプロジェクトを紡ぐヒントを探る	坂本有理
016	本書の使い方	

017 1章 なぜアートプロジェクトは紡ぎにくいのだろうか

018	言葉にならない「もやもや」を抱え続けること	藤浩志
022	「アートとは何か」から考える	佐藤悠
028	アーティストと向き合ってみる	小川希
032	語られ方も変わっていく	羽原康恵
036	紡ぐのは、アーティストの作品だけじゃない	アサダワタル／荒田詩乃
040	アートプロジェクトが地域を紡ぐ	小高日香理
043	1杯のコーヒードつなぐ	L PACK
046	思いを伝えるための仕組みづくり	三宅航太郎

050	場づくりの視点に学ぶ	鈴木一郎太
053	アートプロジェクトは紡ぐのが難しい！	長島確／川瀬一絵

061 2章 言葉で紡ぐ

062	文章を読むこと、書くこと	加治屋健司
066	目には見えない価値を伝える	多田智美
070	多様な視点で魅力を発見する	「コロカル」編集部（及川卓也／榎本市子）
074	出版と編集で伝えられること	影山裕樹
078	内側で練って生まれる言葉	中田一会

083 3章 体験で紡ぐ

084	案内人としての心得	嶋田昌子
089	どのように伝えるかを模索する	松田雅代
094	地元から紡ぐアートガイド	嘉原妙

088 紡ぐプロセスを丁寧

—— 笹川尚子

102 【WORK】アートと地域に出会うツアアを企画しよう！

RESEARCH — 横浜で活動するクリエイターやアーティストに話を聞く！

PRESENTATION — 実践！二人でツアアを考える

106 2017年度思考と技術と対話の学校「言葉を紡ぐ」「体験を紡ぐ」講座一覧

108 あとがき

—— 森司

110 ブックリスト

111 編集後記

本書は「思考と技術と対話の学校」(2017年)の連続講座
「言葉を紡ぐ」「体験を紡ぐ」をもとに制作しています。

「思考と技術と対話の学校」……2014年に開校した、アートプロジェクトを「紡ぐ力」と「動かす力」を身体化するためのスクールプログラム。社会的な課題を思考し、アートプロジェクトの現場をつくる技術を磨き、問題意識を共有するメンバーと対話しながら学ぶことができます。アーツカウンシル東京「公益財団法人東京都歴史文化財団」による人材育成事業「Tokyo Art Research Lab」のプログラムです。





「アートプロジェクトを紡ぐ」とは

「アートプロジェクトを紡ぐ」とは、

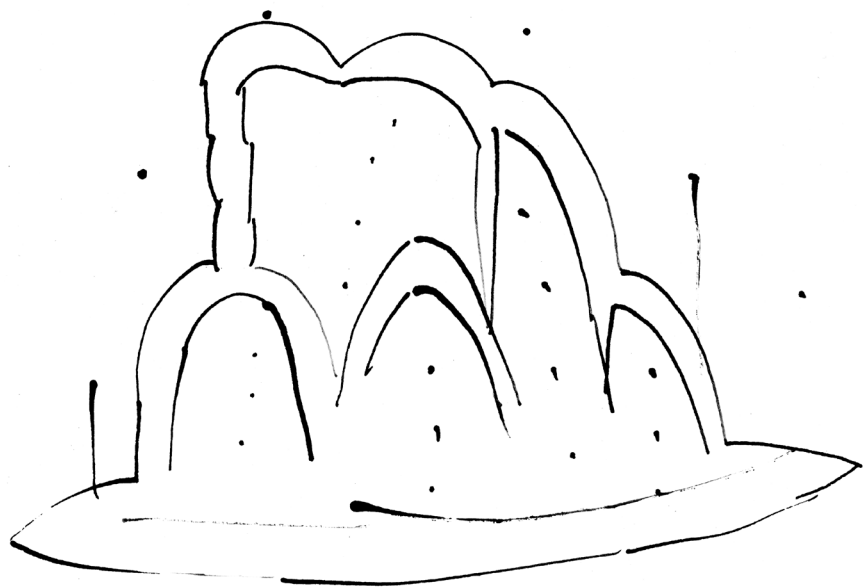
アートプロジェクトの断片をすくいとり、伝えること。

「思考と技術と対話の学校」では、

アートプロジェクトを紡ぐためのさまざまなアプローチを試みました。

1章 なぜアートプロジェクトは 紡ぎにくいのだろう

アートプロジェクトとは何か。
アーティスト、ディレクター、
コーディネーターなどの話から、
その紡ぎにくさの根源を探ります。



本書の使い方

～アートプロジェクトを紡ぐために～

それぞれの目的に合わせて、本書を読み進めてください。

-
- ・アートプロジェクトとは何か?を知りたい!
 - ・アートプロジェクトを伝えるためのヒントを探りたい!

→1章 なぜアートプロジェクトは紡ぎにくいのだろう

-
- ・言葉で伝えたい!
 - ・編集をしたい!

→2章 言葉で紡ぐ

-
- ・だれかと対話しながら伝えたい!
 - ・ツアーを企画したい!

→3章 体験で紡ぐ

言葉にならない「もやもや」を抱え続けること
イメージや言葉になる前の状態とは？

藤浩志「美術家／秋田公立美術大学大学院教授」

アーティストとして、さまざまな地域でアートプロジェクトを行なう藤浩志さん。

「伝えられないからやっている」という藤さんから、

イメージや言葉になったり、意識されたりする前の段階の重要性が話されました。

言葉にならないもの

言葉を「紡ぐ」ということは、つまり意識化し、認識をつくっていくことです。でもそれ以前に無意識という段階があります。感覚的に「なんとなく面白い」とか「なんだか違う」とか。でも何が違うかはわからない状態。それが重要だと思っています。

あるとき気づいたのですが、僕はイメージを立ち上げる仕事をしているな、と。つまりイメージを立ち上げる前の状態があるということです。そこでは言語化もされないし、形にもなっていない。それを「もやもや」と名付けてみました。これは大発見だと思った。違和感があるけれど、それが何かはわからない状態を「もやもや」と呼んでみたのです。もやもやを形にしようと、ああでもない、こうでもない、と形をつくっていく人がいます。それは研究者だったり、起業家だった

り、デザイナーだったり、アーティストだったり。「もやもや」は言語化や表現の種になります。僕は昔からコンセプトは「くそくらえ！」でした。「君の伝えたいことは何ですか」と聞かれても、もやもやしかないわけです。「無意識」に向き合ってイメージ化しようと右往左往しているのだから、伝えたいものが言語化できていない、コンセプトを伝えるために表現するのではなく、無意識のなかから意識を探るために表現しようとしているわけです。

プランを出さないプロジェクト

一つ、僕のプロジェクトを紹介します。瀬戸内国際芸術祭での「藤島八十郎をつくる」というプロジェクトです。その名の通り、「藤島八十郎」さんという架空の人間をつくるプロジェクトですが、実はこれ、なにをつくるかを決める前に始まりました。芸術祭や展覧会では、まずは「プランを出してください」といわれます。それは社会では当たり前ですね。計画が出て、それに基づいて予算がついて実施する。最終的なイメージをまずは出すんです。でも、そうではない方法もあるはず。スタートの地点だけを定め



藤浩志「藤島八十郎をつくる」(瀬戸内国際芸術祭2010、香川、2010年)。

藤浩志さんの
「言葉」と「美術」



受講生1: 藤さんのお話のなかでは重要なキーワードがたくさん出て来ました。藤さんの使われる言葉の定義がすごく新鮮で、そういう考え方や言葉をどのように解釈するかをある意味でつくっていくらに考えてお話されているのが刺激的でした。

藤: 僕は本を読むのが苦手というのがありますが、体験して感じながら理解することで、言葉を紡いでいるような気がするのです。近代の美学や美術史で語られてきていない言葉をつくらうとしたり、独自の解釈をつくっているのだと思います。その意味では僕の場合は個人的なものとして使われるのですが、毎晩のように友達と飲みながら同じことを話したり、ある地域の人たちと同じ言葉を共有して活動するうちに、同じ言葉を僕の知らないいろんな人が使うようになっていたりして、不思議だなと思うことがあります。でも全然別の意味で使っていたり。しかし、一つの言葉の解釈もいろいろあっていいと思います。

受講生2: 藤さんに聞いてみたいのですが、ご自身はアーティストという意識をお持ちなのでしょうか。もしかして、そんなところには固執されず、もっと先の、私たちがまだ言葉にできていないことも言葉にされているのではないかと思います。

藤: 僕がやりたかったことは、面白いものやすごいことをやりたい、ということです。それには美術じゃないほうがむしろ自由です。作品というフレームに縛られると、面白くなっていくこともなくなる。なので、別に美術じゃなくてもいいと思っています。ただ結果的に美術になってしまうこともあります。いつのまにか美術館の館長になってしまったり、美術大学で教えていたり。でもあくまでも美術が面白いわけではない。美術と呼ばれているものでつまらないものもたくさんあります。しかし、常識を超えて圧倒的に面白いものやありえない存在を美術や芸術と呼ぶことには同意しています。面白いと思うことがたまたま美術の周りには多い。だからたまたま作家になりたいな、と思うときもあって、そのうちアーティストとしてデビューするかもしれません(笑)。



藤浩志「藤島八十郎をつくる」(瀬戸内国際芸術祭 2010、香川、2010年)。

て、そこから一つひとつ方向性を決めていく方法です。ゴールを決めてそこに向かってまっすぐ進むと、その途中で出て来たいろいろなものを排除することになります。この方法だとより予期せぬ面白いものが生み出されるのではないかと、思っているのです。「藤島八十郎をつくる」はまさにそのプロジェクト。藤島八十郎さんは、面白いものが生み出されるための仕組みなんです。

ボキャブラリー

藤島八十郎はつくるのではなく、「いじる」プロジェクトでした。何かをつくらうとすると「つくる」という概念が出てきて、それに縛られてしまう。人の思考はボキャブラリーに縛られています。例えば大学の授業で学生に落書きをやらせたら、落書きのボキャブラリーが意外と少ないことに気づきます。子供も小さいうちは突拍子もないものを描きますが、4歳以上になると見たことのある記号を描こうとします。でも見たことのないものは描けないんです。つまり新しいものを生み出すとしても、自分の経験からしかつかれない。経験のボキャブラリーに縛られてしまう。それを打開するにはつくらうとせず、いじることが大切だと思っています。古い家をいじる。掃除をする、修理をする。そうすると誰かがやってくれてくれる。話しているうちに面白いね、という新しいイメージが発生する。それが重要で、何かをいじらうとすると何かが発生していくのです。

藤浩志(ふじ・ひろし)

バプアニューギニア国立芸術学校に勤務した際、原初的表現と文化人類学に出会う。帰国後、土地再開発業者・都市計画事務所勤務。1992年、九州で藤浩志企画制作室を設立。「藤島八十郎をつくる」など作品を多数制作・発表。

「アートとは何か」から考える 対話によるアートプロジェクトの伝え方

佐藤悠（編集部／ゴロゴロ助平代表／御膳屋家元／知ったかアート大学学長）

口述表現によって「アートとは？」を紡ぐアーティスト、佐藤悠。
彼が考える「アートプロジェクト」、
そしてすでにあるものの伸びしろを増やす「かたり」とは。

分からない、の一步先へ

「アートはいろいろあってよく分からないもの」と、お手上げ状態で止まってしまおう方も多くいると思います。その分からない「アートを紡ぐ」とは、アートのさまざまな輪郭を増やしていくことだと思います。自分が気になってしょうがないものはありますか。どんなにくだらないことでも、それがアートへの最初の入り口になるかもしれません。

アートプロジェクトとは、を紡ぐためのヒント

僕はアートとは特殊な価値体系であり、理解するには歴史をたどってその成り立ちを知る必要があると思っています。そのため、アートを説明するときにはまず美術史の流れを説明しています。

歴史を知り共有言語を得ることで、相手のもやもやの位置をマッピングできるようになり、そこではじめて二人で次の地点に進むことができるのです。時間がかかる上に波及性はありませんが、これが一番近道な気がしています。「もやもやしていたものがすっきりしてまた次に行ける」と、整腸薬的な感想をもらったこともあります。

加えてアートプロジェクトについて僕がよく話すのは、決して課題解決の手段ではないということです。社会問題を直接解決するのはデザインなどの別の領域です。直接の解決だけを考えていると煮詰まってしまうことってありますよね。そういうときに明後日の方向へわざと行ってみることで道を開ききっかけをつくる。それがアートの役割だと思います。

また日本では、参加者がみんな笑顔になるような肯定的なプロジェクトが最近多いので



「知ったかアート大学」(常陸太田市梅津会館、茨城、2019年)。大学の名を借り、佐藤悠自らがアートの歴史や成立の背景を説明する。アーティストならではの目線で受講生と交流しながらアートについて知ったかぶりしてもらおう講座。

すが、目を背けたくなるような問題に対して批判的なアプローチをすることも社会との関わり方の一つですよね。世界的に見ると、アートプロジェクトにはそういったものも含まれます。アートとデザインの間や、肯定的なものや批判的なもの間は、はっきりとした線で分かれているのではなく、グラデーションでつながっています。アートプロジェクトを伝える役割とは、多種多様に存在するプロジェクトの間にあるグラデーションに気づき、そこをほぐして編むことだと思います。手間は何でもいいですよ。紙芝居でもいいし漫画で伝えるのもいい。自分なりの翻訳の仕方を考えてみてください。

アートを伝えること

アートを伝えることを活動で重視するようになったきっかけには、自分の活動の伝わりづらさがありました。伝わらなくてもいいというアーティストもありますが、僕は全然あきらめられなくて。もともと喋るのがすごく好きだったので、その性根と言うか、性を主軸にすることが、活動を続ける上での原動力になる気がしました。

僕も含め、アーティストのなかには「自分はこれしかできない」と思っただけでやっているという人も多いと思います。「アートとはこうあるべき」と、高い理想を持って突き進む人ももちろんいますが、アートに対する強い信仰心がないとそれはできないと思います。僕はむしろアートへの信仰心が薄いところもあり、それはコンプレックスだったりしたのですが、だからこそアートと距離のある人たちに、正攻法とは異なるアプローチができるのではないかと。俗っぽい僕だからこそできることがあり、それが自分の役割ではないかと最近ようやく思えるようになりました。

見方を伝えて芸術祭の伸びしろを増やす

アートプロジェクトや芸術祭は日本ではたくさん開催されていますので、例えばツアーのようなものを通して見方を変える企画が面白い気がします。新しく何かをつくることから、見ることや伝えることに目線を移すことで、芸術祭の伸びしろが増やせないかと考えています。

作品を回るアイデアはいろいろありますが、僕が「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」で計画したのが、『ART MAP WORD』です。これは芸術祭を巡る「地図」と「言葉」を集めた自主発行のフリーペーパーで、地元の方々や常連の鑑賞者から私的な視点を集めました。そのリサーチのなかで、ジェームズ・タレルの《光の館》の元管理人さんと話したのがとても面白かった。作品を初めからずっと見守ってきた人で、《光の館》に対する記憶やログ、言葉がたくさん溜まっています。それがすごく貴重だと気づきました。作家よりもその作品を見続けている人が、越後妻有のあちこちにいます。その人たちのトークショーをするのも面白いですよ。自分の語りにもこだわることなく、人の「ログ」という鉱脈を解きほぐして編むこともまた、既存の作品や芸術祭の見方を変えるきっかけになるのではないかと思います。

佐藤 悠 (さとう ゆう)

1985年三重県生まれ。「はなし」「かたり」を主に用い、伝達や記録の不可能性を前提に、自身や他者を語り直す表現などを行っている。一枚の紙に絵を描きながらその場にいる全員で物語をつくる「いちまいばなし」、洞窟壁画からアートプロジェクトまで約2万年の美術の歴史を2時間でおさらいする「知ったかアート大学」などさまざまな活動を展開。

対話を実践!

佐藤悠さんと受講生のやりとりから、対話のコツを紹介。

佐藤： 形がなくて扱いづらいアートプロジェクトのことを、同様に不定形な「水」をイメージして考えてみましょう。みなさんは水を飲みたいとき、どうしていますか?〈受講生を指名〉



受講生： コップに入れます。

佐藤： そう、そのままだと扱いに困るけど、器に入れてしまえば運べたり分けられたりと、扱いやすい。でも、より水らしいのはそうではなく、不定形のままの、コントロールできない状態ですよ。アートプロジェクトには不定形なものも多く、水と同様、器としてのコンセプトやルール、テーマなど、つまり枠組みを設けることで扱いやすくなる反面、その自由度は制限されます。枠組みだけだと萎縮してしまうし、ただ自由にやらせてしまうと收拾がつかなくなる。そのバランスをどう設計するかが重要です。僕が発話する表現をやる上でも、あらかじめ設けた枠組みとして、構造的に「語る」部分と、即興的に自由に「話す」部分があります。「語り」の語源には枠組みを想起させる言葉があるのですが、なんだと思いますか?〈受講生を指名〉

受講生： 硬い感じがします。

佐藤： 硬い、かっちりしている感じ。そう、「型(かた)」や「かたどる」から来ているという説があります。「伝えやすく加工された情報を、きちんと手渡す」というのが語りのイメージかなと思います。一方、「話し」はその逆です。この語源は何だと思いますか?同音異義語です。〈受講生を指名〉

受講生： 離しですか?



佐藤： そう、「話し」てしまう。ぼいっと自由にさせてしまうイメージです。他愛のない、止め処もない会話みたいなものが「話し」です。効果的な「語り」と「話し」、つまりは「枠組み」と「自由」のバランスは、扱う内容によって違います。プロジェクトを運営する・つくる立場でも、伝える立場でもこの二つを同時に扱う意識は大切です。

POINT | 佐藤悠さんによる、対話のコツ!

対話型のツアーや鑑賞、授業などどんな場面でも、「はい、どうぞ喋ってください」ではやはりみなさん黙ってしまいますよね。例えばきっかけとして、今僕がしたように、簡単な誘導尋問形式で答えてもらう。「信号は、赤と青と何でしたっけ?」みたいな質問でキャッチボールをすることで、まずは発言した気になってもらい、そこから徐々に対話に持っていきましょう。初めて参加する人が多い場には、慣れた人を仕込み、まずはその人に発言してもらおうのも、場の空気を変える一つの手段です。

対話による鑑賞でのコツは、「この作品を見てどう思いましたか」というような漠然とした解釈をいきなり聞くと、「理解度を発言によって評価されるのでは?」と警戒されてしまうので、そうではなく、「この絵には何が描いてありますか?」など、具体的な内容を答えやすい質問をします。そうすると、自身の解釈を聞かれているとあまり感じさせずに、発言してもらえるし、内容をこちらが読み解くことで、心情や判断を取り出すこともできます。あとは何をいっても面白くなるような仕組みづくりと、雰囲気づくりが大事だと思います。ちょっとしたことでも「おお!」「そこに気づいたか!」と、その都度きちんと反応を示す。参加者全体のバランスを見て、たくさん話す人には触れすぎず、あまり話さない人をしっかりフォローする。そういった些細な気配りが大事です。

アーティストと向き合ってみる 多様性を許容するアートとは

小川希 [TERATOTERAディレクター／Art Center Ongoing 代表]

アートプロジェクトのディレクターを務め、アートセンターを運営する小川希さん。

『アート』は考え方を变えるきっかけになる」と話し、

同世代を中心に多くの作家と関わってきた小川さんは、どのように向き合ってきたのでしょうか。

世の中にアートをどう結びつけていくか？

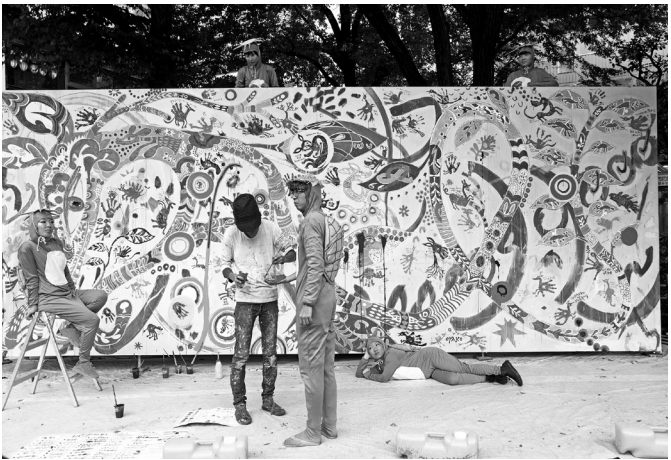
「TERATOTERA（テラトテラ）」は東京都内、JR中央線沿線地域で展開しているアートプロジェクトで、公の場所でアート表現を展開していますが、僕はみんなが「いいね」と言うものをやる必要はないと思ってディレクションをしています。どちらかと言うと、実験的なものや価値が定まっていないもの。価値観を揺るがしたり壊したり、新たな価値観を構築することの方に興味があります。例えば、通りすがりの人が作品と出合って「気持ち悪いものを見てしまった」と思うような、想像していなかったことが急に目の前で起きたとき、無視も否定もできるけれど、違和感のような経験は残っていく。それが重要だと僕は思っています。

だから予定調和なものは一切やらないようにしています。分かりにくく、見る人にとって優

しくないものも必要だと思っています。

答えにたどり着くまでの道筋

TERATOTERAでは毎年、その1年で何を考えて展開するかといったコンセプト文を書いています。僕は日常の悩みや気づき、疑問などをノートに書き溜めていて、そこからコンセプトを考えることが多いです。生きていく上で、悩みは誰にでもありますよね。それは社会や時代に関係していることもあれば、そうではないこともある。こうした「どうにもならないこと」に対して、もう少し知りたいたい、意見を聞きたいと思ったときは、本を読んだり情報を集めたりして、一人で解決する方法もあると思います。ですが、僕は作家と一緒に考えることが面白いし好きなのです。作家は自分の問いかけに対し、全く予想外の答えを出してくる。「価値観が異なる他者と生きること」についてコンセプトを書いた



遠藤一郎扮する「カップ師匠」と「カップ族」の団が、浅井裕介の作品「生きとし生けるものへ」の公開制作中の現場を訪れている様子（TERATOTERA祭り、東京、2016年）。 Photo: Hako Hosokawa

TERATOTERAの作品から

作品の見方

2017年、小川 希さんがディレクターを務めた展覧会

「TERATOTERA祭り2017 Neo-political～わたしたちのまつりごと～」では

政治的な表現をテーマにJR中央線三鷹駅周辺で10組の作家が参加。

本展の作品を通して小川さんが展覧会の見方を解説。

受講生： うらあやかさんの作品を体験しました。どんな作品かわからず不安なまま参加して、体験したあとどう理解したらいいかわからず、でも「あれはなんだったんだろう」と印象に残っています。

小川： うらさんと参加者が違う方向を向いて歩き、玉川上水沿いを往復する作品ですね。まず何歩で一番端までいけるのかを数えます。

受講生： 最初は、曲がりくねった水路の横を後ろ向きに歩くんですが、とても心細かったです。

小川： 端まで着いたら、今度はそのまま歩いて戻ってくる。行きは後ろ向きだった参加者は、帰りは前向きで歩きます。行きと帰りの歩数をそれぞれうらさんが数えていて、その差を最後にボタンが縫われた布に書いて、参加者に渡します。

受講生： 歩数の差を伝えてくれたことや、水路の横を通ったことに意味があったのかなと思いました。

小川： これはあくまで一つの見方ですが、一緒にいる二人が共有していた時間と空間は、実は別々のものだった。その「差異が社会を構成している」というメタファーがボタンだったのかもしれませんが。「みんなで何かをする」ことに懐疑的ではあるけれど、儂いつながりを大事にしている、そういう作家だと思います。ですが、これは僕の考えであり、正解ではありません。作家の多くは、作品には言葉を超えた意味があると思っています。言葉は導入であり、感じ方はそれぞれに委ねられるものです。



うらあやか「葬式のと、赤ちゃんの話をして少し大丈夫になったから」(TERATOTERA祭り、東京、2017年)。

2016年には、カップパに扮した「カップパ師匠」という作品が出てきたり。社会状況を踏まえた真面目な問いを蹴散らしてくるんです。ただ、そこには自分が思いもよらなかった別のルートがたくさん隠されています。新しいコミュニケーションの仕方や、相手を理解するヒントがあったりして、自分の物事の考え方を根本から変えられる経験になるのです。

生きづらさを乗り越えるためのアート

僕は、信頼している作家に対しては展覧会のテーマと展示場所以外は「もう少しこうしたら」とあまり言いません。本番にならないとどんな作品ができあがるのかわからない状況をつくっていきま。このやり方は大変で、作家の経験や能力、今後の方向性を熟知していかないといけない。悩まされることもあります。僕はそれがすごく重要だと思っています。アートは直接何かの役に立つことは少ないかもしれませんが、考え方を考えるきっかけになるもの。作家と付き合っていると、自分の考え方が絶対的だと信じて生きることがいかに不便で不自由か、そのことがいかにいろいろな軋轢や摩擦、人とのぶつかり合いなど困難なことを起こすかに毎回気づかされます。僕自身が頑固にならずにいるためにも、予想だにしない驚きを与えるアーティストを大切にしているのです。

小川希(おがわのぞむ)

1976年東京都生まれ。2002年から5年間、若手作家を対象とした大規模な公募展「Ongoing(オンゴイング)」を開催。その独自の公募・互選システムで形成したネットワークを基盤に、既存の価値にとらわれない文化の新しい試みを実践し発信する場を目指し、2008年に吉祥寺にArt Center Ongoing(アートセンター・オンゴイング)設立。2009年よりTERATOTERAディレクター。

語られ方も変わっていく

活動の転換期を経て変化した語られ方と、自分たちで発信すること

羽原康恵「アートコーディネーター/取手アートプロジェクト実施本部 事務局長」

市民と行政と大学が共同で行なう、茨城県取手市の「取手アートプロジェクト（TAP）」。
ベッドタウンとしての歴史を持つこのまちで、

20年近く活動が続けるプロジェクトの変化と、それに伴う「語られ方」とは？

フェスティバル型から通年プロジェクト型へ

「取手アートプロジェクト」は、茨城県取手市で1999年に始まりました。きっかけは、東京藝術大学の取手校地ができたこと。新設された先端芸術表現科に、市の行政から「駅前に何かパブリックアートを置いてくれないか」と依頼があったそうです。教授陣は、今はパブリックアートの時代ではないということで「形は残らないけれど一緒に活動しませんか」と提案したそうです。

1999年、スタートの年は、現代美術の「公募展」と、地元作家のアトリエを公開する「オープンスタジオ」を行ないました。翌年からは「公募展」と「オープンスタジオ」を交互に開催し、それぞれ秋頃に10日前後行ないました。

2010年に、毎年会期を設定したメインのイベントを行なう「フェスティバル型」をやめて、

より地域の日常に寄り添うかたちにシフトする「通年プロジェクト型」へと変わりました。NPO法人もこの時期に設立し、長期の事業ができる体制を整えました。ベッドタウンとして発展してきた取手の特色に着目し、主なプロジェクトは「アートのある団地」と「半農半芸」の2つにし、それぞれ活動拠点を構えました。加えて芸術活動環境の整備という位置付けで、ワークショップや地元の作家支援、アートマネジメントの人材育成などを行なっています。地域の人たちと同じ立場で貸し借りの関係が続けつつ、ともに活動することが多くなりました。

語られ方の変化

「フェスティバル型」だった2009年までは、美術に特化したメディアで取り上げられることがほとんどでした。具体的には、雑誌だと『美術手帖』、ウェブだと『Tokyo Art



「アートのある団地」。出身や世代もさまざまな人たちが暮らす団地の一角で、自治会や民生委員、市民ボランティアとともにアートスペース兼コミュニティカフェを運営している。行政の仕組み上は取手市の高齢福祉課との連携事業。パートナーアーティストたちが定期的に通い、プロジェクトを行なっている。



フェスティバル型で開催していた2006年のプロジェクト「一人前のいたずら——仕掛けられた取手」(茨城県取手市内各所)。写真はヤノベケンジ《Flora (フローラ)》、Antenna《日出ズル富士ノ神 立体来迎図》、尾崎泰弘《古代天文台》《Blowin' in the wind》。

Beat(トキヨーアートビート)』や『Landscape(アートスケープ)』です。ここでは主に美術批評の対象になっていました。

ところが、2010年以降はそうしたメディアでほぼ扱われていません。新聞のほか、まちづくりや地域活性、福祉の分野でのブレイクスルーの例として取り上げられることが多くなりました。それにはいい面と悪い面があるかもしれません。「役に立つアート」という部分を抽出して扱われがちで、われわれが本質だと捉えていることが載っていないジレンマもたびたびありました。また複数年を経ないと事業の価値が見えないプロジェクトでもあり、自分たち自身で言葉を残していないという焦りも感じるようになりました。そこで、2016年からは広報紙『あしたの郊外』を発行し、プロジェクトの全体像や目指している姿を伝えています。

周りの言葉に支えられて

最後に一つ、2010年の転換期に支えられたアーティストからの言葉を紹介します。「今後どういう活動をしていこう」「フェスティバル型からどのように脱却しよう」というとき、アーティストの野村誠のむらむらまことさんが「一人対一人でもいいから、絶対に『顔』が見えるプロジェクトしかやらないのはどうか」とおっしゃったんです。そこから、不特定多数に向けたプロジェクトは一旦やめました。近年、演出家の羊屋白玉ひつじやしろたまさんと行なっている、TAPクロニクルの制作のためのリサーチで、これまで取手アートプロジェクトに関わったアーティストや市民の方たちと再会して話をきいています。この18年(講義実施時)がどういものだったか、まさに自分たちで記録しなければならぬと考え始めています。

羽原康恵(はばらこ、やすえ)

1981年高知県生まれ、広島県、三重県育ち。筑波大学国際総合学類卒業、同大学院人間総合科学研究科芸術学専攻(芸術支援学)修了。静岡県の複合文化施設での企画運営従事を経て、特定非営利法人取手アートプロジェクトオフィス理事・事務局長。TAPが通年型活動へとシフトする転換期を担い、「アートのある団地」の立ち上げほか、拠点運営などに取り組む。

紡ぐのは、アーティストの作品だけじゃない

アーティストではない人たちのささやかな表現をどのように伝えるか

アサダワタル「文化活動家／アーティスト」、荒田詩乃「NPO法人アートフル・アクション・スタツ」

「記憶」にまつわるさまざまなプロジェクトを行なってきたアサダワタルさん。
東京・小金井市では、誰でも持ちうる「より幸せな日常や、より素敵な関係性のために
行なわれる些細な表現」を「秘かな表現」と名付け、それらを紡ぎました。

プロジェクトを通じたまちの「記憶」のたどり方

アサダワタル（以下、アサダ）：僕は、福祉や地域づくりなど、いろいろな分野が混ざった領域で活動してきました。必ずしもアートプロジェクトと呼べるものばかりではありません。もともと僕は、美術に縁のないただのバンドマンで。音楽からすべての活動が始まりました。アートプロジェクトでは、演奏や作曲をするだけではなく、まちの人と喋ったり、CDを交換したりすることもありません。それは、僕が「既存のものをどう使い直すか」という観点を持っているからです。そのなかでキーになったのが「記憶」でした。今回は「記憶」を軸にした三つのプロジェクトを紹介します。

一つ目は、大阪で行なった「KPPPL（借りパクプレイリスト）」（2012年）です。ここではまちの人から「借りパク」中のCDを約100枚集め、借りパクしているエピソードでポップをつくり

展示しました。そのなかには、同じアルバムが3枚あったのですが、それぞれのエピソードが全く違う。記憶によっても見え方が変化することを実感しました。次に日雇い労働者のまち・釜ヶ崎（大阪府大阪市）での「カマン！TV」（2009～2011年）。青春時代を思い出すような映像を見ながら釜ヶ崎に住む人たちが語ります。その語りによって釜ヶ崎の歴史が共有され、次のプロジェクトにつながりました。三つ目は福島県いわき市の県営復興住宅・下神白団地でのプロジェクト「ラジオ下神白」（2016年）です。住民の馴染深い音楽を通じてまちの記憶を語れるような場をつくること、また団地の集会所に來ない人もその話が届く仕組みをつくるのが目的でした。人の記憶は、時と場合により慎重に扱わなくてはなりません。ただし、こうした角度からではないと語れないこともあると思います。

さまざまな記憶を編集し、「伝わるとは何か」を考える

アサダ：次に東京・小金井市でのプロジェクト「小金井と私秘かな表現」（2015～2018年）を荒田さんと一緒に



左／「私」の「記憶」が編みなおされる、市民一人ひとりの生活展「想起のボタン」（小金井宮地楽器ホール 市民ギャラリー、2016年）。 右／「ラジオ下神白」（Art Support Tohoku-Tokyo、福島、2016年～）。「下神白団地」に住まう人々に音楽と、それにまつわる思い出を伺い、ラジオ番組風に編集した音源を制作するプロジェクト。

紹介します。表現とは、生産でも消費でもない、と思ったところからスタートしています。例えば音楽をつくる人や演奏する人だけではなく、聞いている人が自分の記憶を音楽に投影することも「表現」ではないでしょうか。「秘かな表現」とは「より幸せな日常や、より素敵な関係性のために行なわれる些細な表現やこと」と定義しました。創造的に暮らすための実践を繰り返すのがこのプロジェクトです。NPO法人アートフル・アクション！で運営を担当した荒田さんに展示の紹介をしてもらいます。

荒田詩乃：プロジェクトの主役は「市民メディアーター」と呼ばれるボランティアメンバー。市民メディアーターは「秘かな表現」を行なう主体でもあります。小学生から大人までの市民メディアーターと一緒に、展示やイベントの準備をしました。ミーティングは平日の夜。アサダさんも含めてご飯を持ち寄って集まり、パーティーのようなミーティングをしたことが大事なプロセスでした。こうして、2年目に小金井市内のギャラリィで「想起のボタン」（2016年）という展示を行いました。展示は三つのセクションに分かれています。一つ目はまちの人の記憶を書いた紙を白い風船に付けて、80以上の記憶を漂わせました。二つ目は、アサダさんやスタッフがまちの人にインタビューし、そのなかから出てきた個人的なエピソードを形にしました。例えば「昔神社に行つて石を拾った」という話が出てきたら、スタッフがその神社に実際に行き拾った石を展示する、といったことです。最後のセクションもまちの人へのインタビューですが、市民メディアーターがインタビューしています。市民メディアーター自身の状況や記憶も混ざり合った作品となり「記憶の編集度」が高くなりました。この一連の制作に関わり心に残ったのは、90歳を超えた女性からお聞きし

た話。戦時中に病院船で働いていたと話しながら、揚子江の波のポーズをされたのです。「波がね、」と言って何度もポーズをされて。そのとき私も揚子江の波が目の前に現れた気がして、人の語りを聞くことの面白さを感じました。

また小学4年生の市民メディアーターの女子3人と、まちの記憶を探る作品を考えていたときのことです。みんなで散歩をしたり遊んだりしながら話を聞こうと思い、かくれんぼに参加しました。狭いフェンスの隙間に隠れながら空を見たときに、ふと「これは私の記憶だ」と思ったのです。彼女たちが見ている景色と自分の記憶が重なった新鮮な体験でした。かくれんぼをしたり、ただ一緒に歩いたり、そういう何気ない時間を重ねることが、このプロジェクトにおいてとても大切なことだったと思います。ほかにさまざまな予想を超えた出会いがたくさん生まれたプロジェクトでした。展示最終日、風船は来場した子供たちに渡しました。まちに出た風船がどこへ行ったか、どうなったのかは分かりません。このプロジェクトを通して「伝えるとは何か」「伝わるとは何か」を言葉で表現するのが難しいのですが、私にとってそれはこの風船みたいなことだったのかなと思います。

アサダワタル

1979年大阪府生まれ。音楽や言葉を手立てに、人々の生活現場・コミュニティと近接したアートプロジェクトを各地で展開。芸術を軸に、まちづくりや障害福祉分野などに携わり、執筆や講演を通じてメディアでの提言も行なう自称「文化活動家」。『住み開きから始めるコミュニティ』（筑摩書房、2012年）、『想起の音楽表現 記憶・コミュニティ』（水曜社、2018年）など著書多数。博士（学術）。

荒田詩乃（あした、しの）

1988年埼玉県生まれ。自治体の文化行政担当を経て、NPO法人アートフル・アクション！のスタッフ（2016年）。まちと人の記憶とそこから生まれる表現についてのプロジェクト「小金井と秘かな表現」などのプロジェクトの運営に携わる。

アートプロジェクトが地域を紡ぐ 地域に潜在する魅力を引き出すアーティスト

小高日香理「東京都現代美術館学芸員（事業推進課企画係主事）」

東京都現代美術館が改修工事のための休館中、周辺地域で展開する「MOTサテライト」を訪れた人や参加する人は、アーティストのプロジェクトを通して、まちの日常や、歴史的背景を辿る。アートプロジェクトが地域を紡ぐとは。

地域との関係性を継続するために

「MOTサテライト（以下、サテライト）」は、東京都現代美術館の周辺エリアで展示やイベントを行なうプロジェクトです。東京都江東区の歴史ある深川に、新参者として美術館ができて20年。ようやくこの地域に認知されてきた現状や、商店街の方たちと築いてきた良好な関係が、長い休館期間中に途絶えてしまうのではという危惧がありました。そうした問題意識から、美術館として地域でできること、やるべきことを考えた企画です。

2017年の春に第1回を開催。同年の秋に開催した2回目はテーマを「むすぶ風景」とし、地域にゆかりはないものの、地域のリサーチや人々との交流から作品をつくることに慣れた作家を選定しました。新たな文化の担い手たちは自ら魅力を発信する力がありますが、一方、このまちに長

く暮らす方々も、とても豊かで財産になるような記憶や経験を持っています。外からは見えづらいそうした日常の営みに、アーティストがピントを合わせることで、そこに新たな像を「むすぶ」ことを期待しました。

他者の視点で新たな風景にピントを合わせる

ここでは、おもに二人の作家の作品についてお話ししたいと思います。まず一人目、下道基行したみちもとゆまさんは、地域の人の営みを見つけるワークショップ「見えない風景」を実施し、その記録映像を展示しました。ポストにトレットペーパーが置かれていたり、髪を切る音がしたりといった、人の営みが垣間見えるものを「目印」として記録した自分だけの地図をつくります。そして、地図を参加者同士で交換し歩くことで、また新たな風景に出会う。この地域にはもともと大きなランドマークはなく、かつ路地が入り組んでいるため、路上園芸など日常がはみ出したような光景があることから、このワークショップは充実したものになりました。



Atsuko Nakamura「内在する速度」(MOTサテライト2017秋 むすぶ風景、東京、2017年)。
Photo: 白井晴幸

都市と自然が協働していた過去を紡ぐ

二人目の Atsuko Nakamura さんは、都市と自然が見える形で協働している事例として、川の流れを物流に利用していた木場の歴史を取り上げ、リサーチしました。加えてもう一つの手がかりとしたのが、過去に地域の方々に行ったインタビューで、この地域の発展や変化について、その速度が緩やかだという印象を持つ人が多くいたことです。作家はその緩やかさを、川や水路を持つこの土地に内在する、思想遺伝子なのではないかと考え、作品に落とし込みました。

江戸から現在まで水辺だった場所、約180カ所をリサーチし、各所の環境音を採用しました。そしてスピーカーとたらい、水、インクを用いて、環境音の振動によって水面にできる模様を木材に写し取ると、木材の表面に、木目と水の波紋が重なったような状態ができるのです。そうしてつくった部材を、空間にいかだの形に配置しました。そのほか、制作過程を辿る映像や資料を含めたインスタレーション作品となりました。地域の方々に、「作品を通して、これまで見えてなかったものが見えた」という感想をいただけたときはとても嬉しかったです。サテライトは企画としてもまだ道半ばで、地域を題材にした展覧会のプロジェクトの礎にもしていけそうですし、企画段階からもっと地域の人に入ってもらうことも可能なのではないかと思っています。改修工事後後も続けていきたいと考えています。

小高日香理（おたか・ひかり）

多摩美術大学大学院美術研究科博士前期課程卒業。主な展覧会として、「ミシェル・ゴンドリーの世界一周」展（2014年）、「オスカ！ニーマイヤー」展（2015年）、「MOTサテライト2017秋 むすぶ風景」（2017年）を担当。

1杯のコーヒーでつなぐ

地域が潜在的に持っているものに関係性を生み出す

L PACK / エルバック「アーティストユニット」

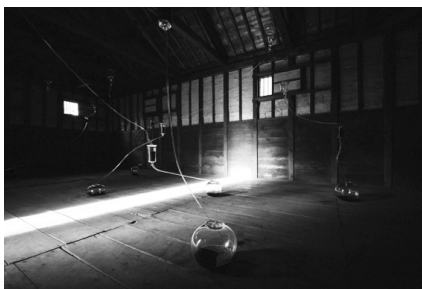
コーヒーを何かと何かの間をつなぐものとして捉え、それを媒介に活動を始めた
L PACK（エルバック）。さまざまな地域に根ざしながら展開する活動は、
潜在的にある文化や人、もの同士をつなぐ場をつくってきました。受講生とのやりとりから。

工芸と水をつなぐコーヒー

小田桐 奨（以下、中嶋）：コーヒーショップにいるような、ラフな感じで聞いてもらえればと思います。メニューの「WORKS」という欄から話を聞きたいものを選んでください。

受講生：注文してもいいですか（笑）。「池上喫水社」^{いけがみづしや}をお願いします。

中嶋 哲矢（以下、中嶋）：長野県の松本市で毎年開催されている「工芸の五月」という工芸のイベントのなかで行なっているプロジェクトです。松本市は工芸が盛んなまち。加えて湧き水が600カ所以上あり、家のなかでも蛇口を捻れば出てくる美味しい湧き水を使って暮らしています。地元の人にとっては当たり前の光景ですが、僕らにとってはそれが特異なことと感じ、工芸と水をつなぐ



左／「きたもとアトリエハウス」。 右／「池上喫水社」。装置は全部で7機あり、すべて違う湧き水で淹れているため、同じコーヒー豆を使っても味が変わる。

ようなことができないかなというところから始まりました。小田桐…築100年くらいの米蔵をお借りして、ガラス作家の田中恭子、建築のチーム・人場研まんばけんと一緒に、吹きガラスでつくった高さ3メートルほどの水出しコーヒー装置を作りました。抽出し始めてからコーヒーができ上がるまで8時間もかかります。水が一滴ずつ落ちる姿を見たり音を聞いたりしながら、見慣れた水の姿をじっくり楽しんでみよう作品です。「喫水」には水を味わう・楽しむ、「社」は日常的には意識していないものを意識する場所、という意味があります。

マスタープランを決めないことで生まれる多様な関わり

受講生…「きたもとアトリエハウス」をお願いできますか。

中嶋…2017年に終了しましたが、2012年にキタミンラボ舎というNPOからの依頼でスタートしたプロジェクトです。埼玉県北本市の自然観察公園に面した築40年ほどの家が舞台でした。北本市は東京のベッドタウンということで、「暮らす人」と「つくる人」が空間を共有しているスペースをイメージしながらしりとりのように即興的に場をつくってきました。

小田桐…大人は近づかないけれど子供や好奇心のある人が集まる、アニメに登場する「博士の家」をイメージしましたよね。「まちにとつて必要じゃない場所って面白い」と。そこで単発的なイベントをしたり、人にフォーカスしたりすることで、日常のなかに面白いことが起きる状況をつくれるのではないかと思います。

中嶋…屋根裏に住んでいたアライグマを退居させるために天井を剥がし、そのことをきっかけにして家の改修をスタート。余計な柱を取ってワンルームにしたのですが、冬だったのでとても寒い。そこでリサーチをすると北本には雑木林が残っていることがわかり、「雑木林の会」という団体から薪を分けてもらい、薪ストーブを導入しました。その後、雑木林の会とは一緒にイベントを開催したりしました。また、椅子をつくるための材料を探していたときに、市内の木工作家と出会ったことから、オリジナルの椅子を商品化するまでに発展しました。こうしてしりとりのように、出来事一つずつ形にしていきました。手伝ってくれた人にそのままカフェの運営を任せるなど、そうこうするうちに運営メンバーも10人くらいに増えました。リーダーやマスタープランをあえてつくらなかったことが、いろいろな人が積極的に関わられる場所づくりにつながったのだと思います。

※1 壁に貼られたメニューには「CAFE」「JUICE」「WORKS」とありWORKSには歴代のプロジェクト名と実施年が書かれている。

L.PACK (エルパック)

2007年よりスタートした小田桐奨(おだぎり・すむ)と中嶋哲矢(なかじま・てつや)によるユニット。最小限の道具と現地の素材を臨機応変に組み合わせた「コーヒーのある風景」をきっかけに、まちの要素の一部となることを目指す。主な活動に「L AND PACK」(東京、2011～2012年)、「きたもとアトリエハウス」(埼玉、2012～2017年)、「VISITOR CENTER AND STAND CAFE」(愛知、2013年)など。

思いを伝えるための仕組みづくり 場をつくり、仕組みを重ねて状況を生み出す

三宅航太郎「うかぶ」LCC 共同代表

鳥取の田舎町にあるゲストハウス「たみ」には撮影禁止というルールがあります。それはただのルールではなく、場所が持つ意味や、運営側が伝えたい思いを伝えるための「仕組み」。

仕組みをつくる

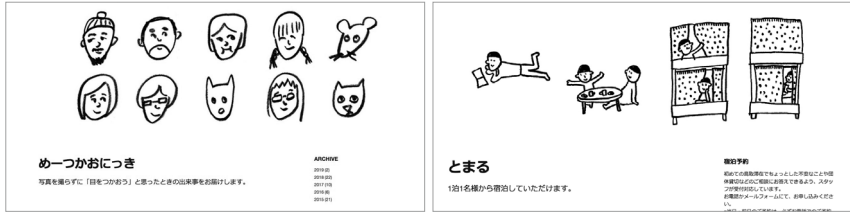
僕にはアーティストとして活動した時期もありますが、その頃から僕の興味は、自分自身が何かをすることよりも、それを誰でも実施できるようにするための仕組みをつくることや、仕組みを配布することにありました。

まず2009年に東京都墨田区すみだのアーティスト・イン・レジデンスで僕がアーティストとして行ったプロジェクト、「おしよくじ」を紹介します。展示会場から徒歩15分圏内にある飲食店の情報を載せたおみくじをつくりました。引いて、出てきた店に行くかどうかはその人次第。おみくじという、決して強制力を持たないからこそ引いた人に縁や興味を抱かせる、おみくじの不思議な仕組みを利用して何かできないかと考えたプロジェクトです。おみくじをつくるために、実際にその

圏内にあった店舗300軒すべてに参加を呼びかけました。このプロジェクトに協力したからと言って、売り上げにつながるわけではありません。しかし、結果的に約60軒が参加してくれました。

立場を入れ替える、ミックスする

その翌年、2010年に「瀬戸内国際芸術祭」が開催された年に行なったプロジェクトが「かじこ」です。「かじこ」の由来は「舵取りをする」。3カ月半の芸術祭の期間、古民家を無料で借りてゲストハウスとして運営しました。ただのゲストハウスではなく、宿泊者がイベントを開催すると宿泊費を千円値引く、という仕組みを付与しています。「イベント」といってもトランプをしたり、自分の恋愛遍歴を喋ったり、と他者が入る隙間があればなんでもいいのです。旅のなかで、ゲストであるはずの宿泊者の立場を一時的に逆転させて、ホストになるような状況をつくれなかな、と。イベントには宿泊客以外にもワンドリンク制で参加できるようにすることで、値引いた宿泊代は回収しました。また「かじこ」ではアーティスト・イン・レジデンスも行ない、アーティストには謝金を出していました。ゲストとホストという二つの立場を逆転させるだけでなく、その中間にいる人や、また違った



ゲストハウス「たみ」のウェブサイトには写真がほとんど使われていない。「カメラは目ですな」というスタッフの言葉をきっかけに、記録したい場面を身体にインプットすることを「目(を)使おう」と言うように。今は「め一つかおにつき」というブログを書いて、言葉で共有している。

アーティストの肩書きを外したのは？

三宅航太郎さんはなぜ「アーティスト」をやめたのでしょうか。



受講生1：「アーティストの肩書きを外した」というところと、これからも、基本は宿でやっていくのか、もう少しお聞きしたいです。

三宅： 例えば宿が僕の作品で、寝ることがアートとなれば、それを「作品化」しないといけなくて、それにはアートのフォーマットをある程度使わないといけない。ただそうすると僕は世界が狭まると感じました。人間は夜になったら寝るし、誰かご飯を食べたら楽しいし、普通に「生きる」ということをわざわざアートというフォーマットでひろわなくてもいいなど。フィルターをなくした方がより根源的で面白いんじゃないかと思いました。ただ、同じ価値を伝えるためには、宿のフォーマットよりアートのフォーマットに乗せた方がインパクトが強いこともあって、いかに宿業っぽくなく価値を生み出せるかが今の課題です。

受講生2： お話をお聞きして「アートのフォーマット」とはなんだらうと疑問に思いました。

三宅： 価値づけるときに必要になるのがフォーマットだと思っています。「これが新しいアートです」というときに、それまでのアートをある程度引き継いでないと、そう認識されにくい、価値づけにくいのが人間の仕組みだと思います。それが僕には違和感になった。例えばコロケをつかって売る。美味しかったら買ってもらえる。もっと美味しく

なる化学調味料があって、入れたら間違いないく買ってもらえたら入れますよね。アートにも化学調味料みたいなものがあることに気づいて、でもそれを使うのが嫌になったのだと思います。ゲームをクリアする方法が分かった時点で飽きるタイプなので。そういう意味では宿業は、化学調味料をまだ見つけていないから続けられているのだと思います。



Photo: 加藤健

役割を得てそこにいる人など、さまざまな関わり方をミックスすることで、小さな共同体のような場ができました。

閉じることで見えるもの、伝わること

「かじこ」は瀬戸内国際芸術祭会期中のみの実施で終わりましたが、宿という手法への興味は尽きませんでした。ただ、それをアート作品として手がけることには意味を感じなくなり、アーティストという肩書きは外した上で、10年くらいの長期間、低空飛行でいいから小さな営みを続けたいと思いました。鳥取県の松崎という小さなまちで、廃旅館を購入し、「たみ」と名付けました。1階がゲストハウスとカフェ、2階がシェアハウスです。「うかぶLCC」という会社を立ち上げて運営しています。「かじこ」のときはメディアへの露出に積極的だったので、二次情報だけで「行ったことないけど知ってる」という人がたくさんいて、それがなんだか気持ち悪いと感じていました。「たみ」では、逆に写真も取材も禁止にし「閉じてみる」ことをしています。情報としては閉じている「たみ」ですが、始めて5年、まちに人が増えました。小屋を建てて本屋を始める人がいたり、豚小屋をアトリエにする人がいたり、僕らも2店舗目の「Y」をつくったり。さらに5年、変わらず低空飛行でやっていければと思っています。

三宅航太郎（みやけ・こうたろう）
1982年岡山県生まれ。2010年、ゲストハウス型プロジェクト「かじこ」を岡山県にて108日間運営。2012年に蛇谷りえと合同会社「うかぶLCC」を設立、鳥取県湯梨浜町でゲストハウス&シェアハウス&カフェ「たみ」をオープン。2016年、鳥取市に2号店「Pughostel」をオープン。そのほかアートプロジェクトのマネジメントやグラフィックデザインなどを行なう。

場づくりの視点に学ぶ

偶然の出来事を生むための仕掛け

鈴木一郎太「株式会社大と小とレフ取締役」

アートディレクションや場づくりの実践などを行なっている鈴木一郎太さん。
画家としてイギリスで活動していたバックグラウンドも持つ鈴木さんに、
作品づくりや企画のポイントを伺いました。

自身の興味関心を、他人と共有するために

僕は10年ほど前まで、イギリスで絵を描いていました。帰国後はNPO法人のスタッフを経て、建築家と共同で企画会社を立ち上げ、僕は企画を担当しています。企画を立てるとき、自分の興味関心についてよく考えることを意識しています。モチベーションにつながるのはもちろん、他人に自分の企画を届ける点において大事だからです。

そのことに気づいたのは、イギリスの大学に通っていた頃でした。大学ではプレゼンの機会が多く「これは花の絵です」と言うと、あるアーティストから「何で花にしたの？」と聞かれて。「好きだから」と言うと「なぜあなたが好きなものを見せられているの？」と問われる。「きれいだから」と答えるとさらに質問が来る。という具合に、自分のつくったものを人に見せる理由について、と

ことん問われたのです。自分の興味関心を「なぜ」と突き詰めることが、結果としてそれを見たり体験したりする人について考えることになる、と思いました。

まちを歩く演劇作品で紡ぐ

僕たちが企画した二つの事例を紹介します。まず2015年に企画した「例えば朝9時には誰がルーム51の角を曲がってくるかを知っていたとする」。これは「ふじのくに」世界演劇祭2015」で出品した、静岡の住宅地を舞台にしたまちを歩く演劇作品です。

現地は新興住宅地ですが、昔ながらの路地、坂、茶畑なども入り混じる地域。それらの「境界」に興味を持ち、作品にしました。まち歩き面白さには、ふと人の家の様子が見えたり、住人の声やピアノの音が聞こえたりすることも含まれると思います。それは視覚や聴覚、嗅覚などが、土地の境界をあつさり超えるということ。劇は、脚本はあるものの役者と通りすがりの人の境があいまいだったり、たまたま絶妙なタイミングで車が通ったり。観客が日常と非日常の合間で、



セミナールーム「黒板とキッチン」(静岡、運営：株式会社大と小とレフ)。

無意識にまちと出会い、客観性が生じるような状況をつくりました。

機会をつくること、「場」をつくる

次に静岡県、浜松市の市街地に設置したセミナールーム兼交流スペースの「黒板とキッチン」です。簡潔に言うところには黒板とキッチンがあるだけの場所。ここでの興味関心は「自発性」です。来た人自身で何か起こすことを期待し、あえてプログラムやサービスは提供しません。

まず黒板を置き、「黒板」から縁遠いキッチンを置きました。それにキッチンを自由に使えたら新しいことが生まれるかもしれない、と。この空間では多様な人たちが交ざることを大切にしている。レンタルしていますが、なるべく貸し切りではなくシェアしてもらうようにしています。料理教室やワークショップのほか、パーティーの料理を試作しに来た人が、たまたまそこにいた人に試食してもらうような出会いを起こす「場」になっています。

「場」という言葉には「機会」という意味もあると思います。たとえば物理的な場がなくても、誰かと話しているだけでそこは「場」なのではないか、と。連帯感が生まれて、いいアイデアが生まれたり、物事が起こったりする。そうした機会をつくることこそ、場づくりには大事だと思います。

鈴木一郎太（すずき いちろうた）

1977年生まれ。1997〜2007年、イギリスに滞在、アーティストとして活動。2013年、建築家と共同で株式会社大と小とレフ設立。NPO法人クリエイティブサポートレッツにて、様々な文化事業を担当。主な仕事として、「浜名湖花博2014」（静岡）の一部エリアのアートディレクション・設置、地域プロジェクトの研究事業マネジメント、「ふじのくに」世界演劇祭2015（静岡）出品など。

アートプロジェクトは紡ぐのが難しい！

つくる楽しみを共有できるプロジェクト

長島 確「下ラマトウルク」、川瀬 一絵「写真家」

ドラマトウルクの長島確さんと写真家の川瀬一絵さんらが「さいたまトリエンナーレ2016」で行なったプロジェクト「↑（やじるし）」。会期中、随時参加者が増えていく

このプロジェクトを「どのように伝えていくかが課題」という長島さん。その理由とは？

やじるしをつくり、自宅や職場に掲げるプロジェクト

「↑（やじるし）」は「さいたまトリエンナーレ2016」（以下、トリエンナーレ）で展開したプロジェクトです。期間中は、黒板ほどのサイズのパネルを17枚展示しました。パネルには複数の写真がレイアウトされていて、どの写真にも必ず「やじるし」が写っています。そのやじるしは、さいたま市民、あるいは市内で働く人たちがつくったものです。「↑」の向きをトリエンナーレの開催エリアへの道しるべとなるように合わせてもらうほか、「私有地内におさめる」「交通ルールを惑わさない」など多少のルールを設けましたが、基本的にどんなやじるしでもいいから、つくって掲げてみませんかと参加を募りました。そうして生まれたやじるしを、僕を含めたチームのメンバーが訪ね



「A（やじるし）」。「さいたまトリエンナーレ 2016」（2018年9月24日～12月11日）にて実施された長島確+やじるしのチームによるプロジェクト。公募し、参加した人たちが「A」を掲げ、まちの至るところに「A」が現れた。会期中は「A」を撮影した写真を展示。展示会場=大宮タカシマヤ ローズギャラリー

て回り、撮影し、その写真を展示しました。トリエンナーレに来た方は、最終成果としての写真展を見ることになりませんが、このプロジェクトの本質は、実は参加すること、つまりメイキングプロセスにこそあったのです。

誰もが参加できるプロジェクトにするため

トリエンナーレからオフアアを受け、どんなプロジェクトにするかを考えたとき、まず「誰のためのプロジェクトか」を考えました。アーティストが作品をつくり、地元の人が見るといっても、理想としては市民一人ひとりがつくり手であり、鑑賞者であれたらいいな、と。なぜなら企画や準備も含めて、ものづくりのプロセスこそが面白いから。これは僕が普段かかわっている演劇だけではなく、ほかのジャンルにもいえることだと思います。プロのつくり手たちが独占している「プロセス」を一般に開放したい、それも稽古場に来て見学してもらおうのではなく、自分でつくる楽しみを共有できるようなプロジェクトにした、そしてそこに、地元の人たちが持っている面白い発想や得意技が噴き出してくるといい、と思いました。もう一

つ、企画を立てる上で大切な出発点がありました。それは市内をリサーチするなかで、姿の見える人たちの存在に気づいたことです。仕事や学校で留守にしている方や、ご高齢の方、身体が不自由な方、子育て中の方など、さまざまな事情から外出できない人たちもいる。演劇の特徴として、つくる側も観る側も、同じ時間に同じ場所にいないと成り立たないということがあります。でもこのプロジェクトでは「ここに来てください。一緒にやりましょう」ではなく、いろいろな人が自分の都合に合わせて参加できる方法を見つけたいと考えました。

「A」が紡いだ水平のネットワーク

「やじるし」というキーワードが浮かんだのは、リサーチを始めてから1年ほど経ったころです。シンボリックなコミュニケーションをつくるのではなく、まちなかに点在し、それらを結びつけることで水平方向のネットワークを生み出すことはできないかと考え、しかも自由度の高いモチーフをと思、道案内としてのやじるしにたどり着きました。太田省吾おおたしょうごさんの演劇作品「A（やじるし）」シリーズにも着想を得ています。全4作ありますが、どれも「あるとき家の天井に、やじるしに見える染みが現れた。やじるしだとしたら何かを指しているはずだ、行ってみよう」という状況から始まる。その先は、ただやじるしに導かれ、いろんな人たちに出会っていくという、物語があるようなないようなシュールな作品です。今回のプロジェクトでも、その物語の続きのように、まちなかのその場その場から出現したようなやじるしをつくって自宅や職場に掲げてみませんかと誘いました。そうして生まれたやじるしを、写真家の川瀬一絵さんを中心にしたメンバーと一緒に訪ねて回り、撮影しました。多くの撮影に同行したのが、俳優の谷川清美たにがきよみさんです。実は多くの写真のどこかしら

に、谷川さんが登場します。繰り返し同じ人物が登場することで、一枚一枚の写真の間に、やじるしを辿るようなストーリーができてくるのではないかと考えました。衣装担当の藤谷香子さんほか、トリエンナレのディレクター、リサーチャーなど、多いときは10人を超すメンバーでぞろぞろと訪ねたので、カメラマン一人で来るだろうと思っていた参加者はさぞ驚かれたでしょう。

プロジェクトの魅力を伝える難しさ

いくつかのやじるしを紹介しましょう。一つ目は、神田じんて小学校の陶芸クラブのみなさんがつくったやじるしです(54頁写真右)。ある時期、このあたりで陶芸の窯を持つ小学校が一斉に増えたらしいのですが、教える人がいないなどの理由からあまり使われなくなってしまったそうです。神田小学校は代々校長を美術の先生が務めていて、文化活動に対して深い理解があります。今でも電気窯とガス窯、両方がちゃんと生きていて、近所の陶芸家の方が教えに来ているので、放課後の陶芸クラブも活発です。今回は素焼きでやじるしをつくり、参加してくれました。

二つ目は、高齢のご夫婦がつくったやじるしです(54頁写真左)。白いほうは紙に印刷した栄養管理表、青いほうは毛糸の手編みできています。おばあさまは編み物が大好きで、夢中になると平気で徹夜をする。そのせいで体調を崩されたこともあるそうで、心配したおじいさまは70歳を過ぎた頃から食事に関する勉強を始め、エクセルで栄養管理の表までつくった。つまり、編み物に邁進するおばあさまの後を、食事を気にかけるおじいさまが追いかけるという、二つのやじるしができました。

こうして撮影を続けていくと、その過程で、語り尽くせないほどのエピソードが集まりました。

参加者には撮影時に在宅する必要はありませんと伝えていましたが、ときにはもてなしていただいたこともありました。たくさんのメンバーで押しかけることを楽しんでくださる参加者もいました。そんなときはお茶やお菓子でもてなされ、話も弾みます。気がつくつとわれわれチームのメンバーが、スタッフというより、やじるしをたどる登場人物みたいになっていました(笑)。こうして得られる情報量はものすごく多くて、プロジェクトの全貌をどう伝えるか、とても難しい問題です。時間もかけているし、関わった人の立場によって、見えたものも異なるでしょう。シンプルに分かりやすく説明できないこのプロジェクトを、どのように第三者へ伝えていくかは、僕たちの今後の課題だと思っています。

※2019年1月、「さいたま国際芸術祭2020」へ向けたレガシープロジェクトとして「(やじるし)」が再始動した。

長島 確 (ながしま かく)

日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、さまざまな演出家・振付家の作品に参加。劇場外のプロジェクトにも積極的に関わる。進行中のプロジェクトに「まちと劇場の技技交換所」など。2018年よりフェスティバル/トーキョー・ディレクター。

川瀬 一 絵 (かわせ かずえ)

2007年より写真家・池田晶紀の主宰する写真事務所「ゆかい」所属。テーマを定めず衝動的に撮り、それらを編集しながら、衝動的な訳を探るような作品づくりをしている。近年の個展に「風が吹いている」(東京、2018年)ほか。

アートプロジェクトにおける制作プロセスの重要性

長島 確さんと川瀬一絵さんが写真を撮影するプロセスから見えた、このプロジェクトのもう一つの側面を紹介。

長島：今回のプロジェクトにおける写真の役割を考えたとき、やじるしと同時に写り込んだ風景は、間違いなく2016年のさいたま市の生活空間の記録になると思っていました。ある種のアーカイブです。「その場所から出現してきたようなやじるし」とリクエストすれば自ずと場所との関係性も出てくるし、ただやじるしだけが撮れたらいいわけでもない。その場所の様子や空気も併せて撮らないと、意味がないと思っていました。見慣れた住宅地の何気ない日常風景で、でもよく見ると何か変なものや写っている。「あれ？ これはやじるしだ！』って。そういう写真を撮れる写真家は、川瀬さんをおいてほかにはいないと思いました。

川瀬：撮るのはやじるしですが、最後に写真を並べたときに、さいたまのまちが見えてくるようなものになりたいと思っていました。どのくらい寄って撮影するか、構図の中央に据えるかなど、いろいろと実験しながら撮っていました。そのなかで、谷川さんの衣装が不思議と風景に合うんです。あとはたまたま自転車を通るなどの偶然の重なりが面白くて、撮影を止めるのが難しかったです。



「- (やじるし) 」の展示会場。

長島：もちろん綿密に計画を立てた部分もありますが、一方で撮影現場では、発見し工夫して探れる「余地」を意図的に残すようにしていました。ただ段取り通りに進めるだけではつまらなくなってしまいます。例えば、メンバーはどんなやじるしを撮影しにいくかという情報をあえて知らないまま向かう。発見するとみんなが「あ！」となって、そのテンションとともに、どう撮るかを決めました。

川瀬：なかなか見つからないやじるしもありましたね。「私が先に見つける！」「あったあった」「どこどこ？」みたいな。それから道すがら、誰かがつくったものではない、天然のやじるしもありました。それも「野良やじるし」と命名し、撮影しました。

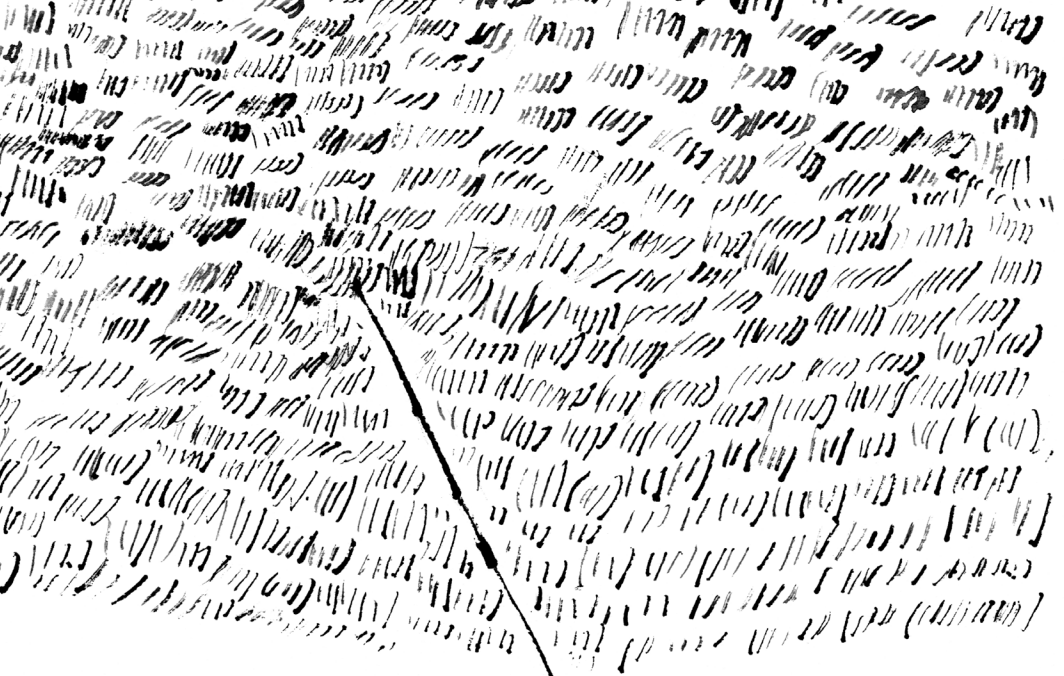
長島：メイキングを記録した写真も大量にありますね。「ベランダでちょっと休んでいきなさい」といわれて、メンバーみんなで休憩しているところ。お茶とおかき、あと枝豆をご馳走になりました。それから、登録があった106件の撮影がすべて終わった日に、お昼を食べにカフェに寄ったら、お店の近くに焼き芋の移動販売車が停まっています。ちょうど焼き芋屋さんも、同じところでお昼を食べていたんですね。参加者でもあったカフェのオーナーに「焼き芋屋さんも参加してくれると思うよ」っていわれ、声をかけたら、「もう今日の商売は終わりだけど、売れ残りが何本かある」と。みんなで「わーっ」と外に出て、焼き芋屋さんがお芋を割ってやじるしをつくり、最後には美味しくいただくという。こうした撮影現場での出会いやエピソードも面白くて、むしろ効率化せずに進めることの大切さに気づき、どんどん速度を落としていきました。



川瀬：撮影のために歩いていると、意外と住宅街には畑が多いことを知ったり、昔ながらの小さな路地に出会ったり、「さいたま市って、こういうまちなんだ」と気づかされることがありました。それから、暑かったり寒かったり、歩き疲れて空を見上げたりとか、移動するプロセスにも意味がありました。

長島：やじるしの写真を集めるだけならば、もっと合理化する方法をいくらでも考えられるでしょう。例えば、参加者に撮影してもらい、写真のかたちで募集をするなど。でもそうすると、写真のクオリティで優劣が出てしまう。撮影も、車を1台借りて合理的に回ることもできましたが、あえてローカルな公共交通機関と徒歩を選びました。面倒で時間がかかっても、ある場所からある場所へ行く、その移動の途中で新たな面白さに出会えた。これはまさに水平のネットワークを生み出すことにもつながっていて、もしピンポイントで点から点へワープするように巡ってしまったり、やじるしとやじるしの間にあるさまざまな物事を見逃していたでしょう。こうしたやり方は、仕事における上下関係や受注発注関係のように、時間を圧縮し、スムーズに目的を達成するためのものではありません。でも、世の中が効率重視だけだったらすごく窮屈なので、息がつけるような異なるレイヤーをつくりたい。プロセスのなかではもちろん失敗もあるけれど、非効率的で遅くて無駄なことが、実はものすごく面白いということ。アートプロジェクトの意義はそこにある気がしていて、今回のプロジェクトを通じて、そのことを再確認できた気がしています。

Photo: 川瀬一絵 (54頁左、59頁)



2章

言葉で紡ぐ

研究者、編集者、広報など、
言葉を扱う専門家の話を通し、
アートプロジェクトの紡ぎ方を考えます。

文章を読むこと、書くこと

読者、情報、説得。三つのポイントとは？

加治屋健司「美術史家／東京大学大学院総合文化研究科准教授」

「紡ぐ」ためのことはじめ。文章を書くには読むことも大事です。

現代美術史を専門とし、多くの媒体に寄稿、評論などを発表している加治屋健司さんが、文章の性質や書き方のコツについて解説します。

構造を把握しながら文章を読む

言葉を紡ぐためには、「文章を書くこと」だけでなく、「文章を読むこと」も同じくらい大切だと思います。読むときは、どういうふうに行けばもっとわかりやすく、伝わる文章になるかを考えながら読むと役に立つと思います。

文章を読むということは、頭のなかで整理をしながら、その筆者の主張を理解することです。そのためには、時間軸に沿って直線的に書かれた文章を、空間的に捉えなおす作業が必要です。たとえば論点が三つあれば、頭のなかにその三つを思い浮かべます。もしメモを取るとしたら、箇条書きにする場合もあれば、図を描く場合もあります。このようにして、文章の構造を視覚的に把握することが、文章を理解する上で大いに役立つと思います。

また、筆者の主張を顔面どおりに受け取ってはいけません。場合によっては事実を誇張して表現していることもあるし、筆者の理解が不十分な可能性もあります。筆者の主張が妥当かどうかを吟味しましょう。また自分や社会にとっての有用性、問題点、歴史的な位置づけについても考えて読みます。筆者が自覚せずに偏った立場をとっている場合もありますから、そうしたことに気がついていく必要があります。

文章を書くときに気をつける、三つのこと

次に文章を書くことですが「誰に向けた文章か（読者）」「読者に必要な情報は何か（情報）」「読者に考えてほしいことは何か（説得）」、この三つに気をつける必要があります。

まずは「読者」。誰に向けて書くのかです。媒体によって、想定される読者は異なります。読者によって、前提とする知識や使用する言葉、主張内容や力点が変わります。新聞や一般雑誌であれば幅広い読者層が対象になりますし、美術雑誌になると美術愛好家や専門家が対象になります。ウェブサイトの場合は誰もが自由にアクセスできて読者層の想定が難しいため、一般的な読者を想定して書くほうが望ましいと私は思っています。

伝えるため、考えてもらうための技術

二つ目に、読者にどのような「情報」を与える必要があるか。情報は過不足なく伝えることが重要です。例えばグループ展では、出品作家の人数によっては、全員の作品や名前を紹介するとなると冗長な文章になるので、代表的なアーティストを選んで書く必要があります。ディテールの描

読み手にも展開がわかりやすい書き方 パラグラフ・ライティング

次の文章の例は何が問題だと思いますか？文章を書くコツを考えます。

悪い例1 オウムは驚くほど賢い鳥です。鳥には翼と羽毛があって、たいていは飛ぶことができます。おそらく、最初は鳥の観察を通して、人間は、空を飛ぶことのできる機械を発明する夢を育んできました。1903年のライト兄弟の初飛行以来、航空産業は急速に発達しました。過去2世紀の産業の発展は、環境に深刻な影響をもたらしました。

悪い例2 オウムは驚くほど賢い鳥です。オウムの行動を観察すると、その頭の良さに驚かされずにはいられません。オウムは何かを学んだり理解したりする高い能力があると、私たちは普通考えませんが、そうした能力があるのは明らかです。他の多くの鳥と比べると、オウムは予想外の知性があることが分かります。

一つ目は導入部で「オウムは賢い」と言っており、それについて話さなければいけないのに、トピックがずれています。二つ目は、ことばを変えて繰り返し「オウムは賢い」といっているだけで、展開と結論がありません。パラグラフは導入部、展開部、結論の3部構成からなり、一つの考えを発展させるものです。次の良い例を見てください。

良い例 オウムは驚くほど賢い鳥です。オウムは人間が話すのを真似ることができますが、これは本能的な行為であって、知性を示すものではありません。しかし、オウムは、宙返りなどの様々な芸をすぐに学びます。こうした芸は本能的なものではありません。それに加えて、オウムは、環境の小さな変化や人間の気分の移り変わりにとても敏感です。オウムが、飼い主に火事を知らせたり、近くにいる人の恐怖心や怒りに反応したりするという話は数多くあります。オウムは知的であるがゆえに、鳥たちの中でもとりわけ人間に愛されるペットとなっているのです。

導入部(実線部)ではトピックを提示し、自分の考えを明らかにします。展開部(点線部)では、そのトピックに対して説明・理由・詳細・事例を示し、考えを展開します。そして結論(波線部)では、パラグラフを通して学んだことを述べます。展開部の議論も踏まえ「だから、～なのだ」と書くことよいでしょう。論文はパラグラフだけではなく、節・章・文章全体もすべて3部で構成します。

ただし、批評や新聞記事を書く場合は、異なる論理が必要かもしれません。批評の場合、意外性をもたせるための要素や、議論を展開するための伏線が必要です。新聞記事では、読者は記事の出だししか読まないことがあるので、最初に重要な情報を入れるように心がけます。

上記の例文は、Paul Rossiter and Department of English, University of Tokyo, Komaba, *First Moves: An Introduction to Academic Writing in English* (Tokyo: University of Tokyo Press, 2004)に掲載された例文を和訳して使用した。

写は、簡潔に情報を伝える必要があるときには適しません。展覧会評であれば、展覧会の主題や目的、出品作家、展示会場、展示方法、展覧会の長所と短所、あるいはほかの展覧会との比較などを述べるとうまいと思います。

三つ目に「説得」、つまり読者に考えてほしいことは何かです。そのためには自分の主張を支える根拠を示す必要があります。例えばある絵画を分析する場合、自分が考える良い絵画の条件や原則というものに結びつけて論じます。個人的な感想を書く場合でも、根拠を示すことで十分説得力を持たせることができます。そして、「文章の種類」を意識して、読者に展開がわかりやすい書き方を心がけると説得力が増すと思います。

加治屋健司(かじや・けんじ)
1971年生まれ。東京大学教養学部卒業。ニューヨーク大学大学院美術研究所博士課程修了。PhD(美術史)。日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ代表。著書に『アンフォルム化するモダニズム カラーフィールド絵画と20世紀アメリカ文化』(東京大学出版会 近刊)、共著に藤田直哉編『地域アートー美学/制度/日本』(堀之内出版、2016年)ほか多数。

目には見えない価値を伝える
出来事が生まれる瞬間からアーカイブまでを編集する

多田智美「編集者／株式会社 MUESUM 代表」

編集者の多田智美さんが考える「編集」とは？

出来事の背景にある見えない価値を伝えるには、どのように携わり、何をすべきか。

多田さんが模索した先には多様な編集のあり方がありました。

編集の仕事とは？

編集者の役割は、目には見えない「価値」を伝えること。アートプロジェクトの根っこには、たくさんの方の想い、その土地に眠る歴史や地形、社会的な背景、まだ言語化されていない魅力など、目には見えない価値が眠っています。私たちは構想段階からプロジェクトに伴走しながら、ともに生み出したい未来を描き、さまざまな過程に立ち会いながら、ささやかだけれど大切な物事を拾い上げて、紡ぐことを大切にしています。伝える目的・届ける相手・生み出したい状況を整理して、適切なメディアで表すこと、またさまざまな立場の人たちのスキルを生かして完成に至るまで伴走することも編集者の仕事として、「ともに考え、ともにつくる」を実践しています。「紡ぐ」を辞書で引いてみると、「綿または繭を糸縫車いとつむりぐるまにかけ、その繊維を引き出し、撚ゆがをかけて糸にする」(『広辞苑』)

とあります。「編集」の旧字は「編輯」ですが、「輯」にはほぐすという意味もあるようです。「紡ぐ」も繭から繊維をほぐして編む、まさに編集行為そのものだなと思います。

熱量をいかにして伝えるか

私が編集者として活動を始めるきっかけとなったのは、金沢21世紀美術館で行なわれたヤノベケンジさんの半年間の滞在制作「子供都市計画」(2004年)です。当時学生だった私は、金沢に住み込み、地元のDJやラッパーを美術館に招いたり、子供対象のワークショップを行ったり、普段美術館には来ない人たちを呼び込むような企画を担当。工房には、昼夜つくるエネルギーが渦巻き、鑑賞者はもちろん、地元の学生や住民など、たくさん人の心を動かしてきました。

終盤に差し掛かるにつれて、「この出来事は、なんとかして残さない」と強く思う



多田さんが編集した本。右/ヤノベケンジ『ドキュメント子供都市計画』(美術出版社、2005年)。左/榎昇、原田祐馬、多田智美『小豆島にみる日本の未来のつくり方』(誠文堂新光社、2014年)。

ように。同じ気持ちだったデザイナー・原田祐馬はらだゆうまさんとともに、本をつくろうと計画しました。でも、二人とも経験はゼロ。まずは企画書をつくり、手当たり次第、相談していきましました。そんななか、ある出版社さんから制作費の半分が準備できればという条件で快諾いただき、そこからさまざまな方を口説きながら資金集めに奔走しました。

そうして生まれた『ドキュメント子供都市計画』は、「その場の熱量を追体験できること」を方針に、ヤノベさんによる日記形式の原稿で全体を構成し、建築家やアーティスト、批評家、学芸員などさまざまな視点から紐解く論考を収録。本の骨格となる日記形式の原稿には、裏話があります。当初は私がニュートラルな視点で客観的に執筆していたんです。だけど、「そのときヤノベはこう言った」というような語り口ではどうしても熱量が伝わらなくて……。急遽ヤノベさんに書き直してもらおうようお願いしました。同じ内容でもヤノベさんを主語にして語られた物語は、まるで半年間の出来事がぶわあーっと立ち上がってくるようで不思議な感覚でした。これをきっかけに、私は編集者としての一步を踏み出し、また熱量を伝えるためには「誰が」語るかということもとても大切だと思うようになりました。

出会いを紡ぐ

それから約10年が経ち、私にとって重要なプロジェクトと巡り逢います。アーティストの椿昇つばのぼるさんと原田祐馬さんの3人で構想した、「小豆島醬※2の郷+坂手港プロジェクト」(2013年)です。掲げたテーマは「観光から関係へ+Relational Tourism」。名所を巡る一度限りの観光ではなく、人と人が出会って生まれる関係にこそ真の豊かさがあるのではないかという想いから生まれたコンセプトです。

350組を超えるさまざまな分野で活動するクリエイターを招聘して、小豆島の未来を考えるプロジェクトを展開。ここでは、さまざまなアーカイブにも挑戦し、記録集だけどころか、本は、今はもちろん未来にも仲間を見つけてくれること、100年後にも残る可能性があると思うと、100年後にも仲間を見つけることができるかもしれない。そういう視点で届ける相手を考えてみることで、また新たな編集方法が発見できるのではないかなと思っています。

※1 「子供都市(子どものための未来のまち)」を大人たちがつくりあげていくアートプロジェクト。

※2 小豆島の坂手港エリアと、醬の郷エリアを舞台にした「瀬戸内国際芸術祭2013」の参加プロジェクト。(主催:小豆島町、プロジェクトディレクター:椿昇、企画:原田祐馬 [UMA/design team] / 多田智美 [MUESUM])。

多田智美 (ただ・ともみ)

1980年生まれ。編集者、株式会社MUESUM代表。龍谷大学文学部哲学科教育学専攻卒業後、彩都M1大学院スクール修了。「出来事」の創出からアーカイブまで」をテーマに、アートやデザイン、福祉、地域など、さまざまな分野のプロジェクトに携わり、書籍やタブloid、WEB、展覧会やイベントなどの企画・編集を手がける。

多様な視点で魅力を発見する
読み手の心に響く記事をいかにつくるか

「コロカル」編集部「及川卓也／榎本市子」

講師はウェブマガジン「コロカル」編集部からのお二人、編集長の及川卓也さんと副編集長の榎本市子さんです。レクチャーとグループワークを通じて、プロジェクトの外側から編集する視点や企画の立て方を学びました。

地域がテーマのウェブマガジン

及川卓也（以下、及川）…「コロカル」は、日本の地域がテーマのウェブマガジンです。「ローカルは楽しい！ ローカルはカッコいい！ ローカルは進化している！」を一つの視点に、旅やアート、食などについて、新たな動きに注目したり、逆に伝統的なものに価値を見出したりしています。

コロカルがアートを取り上げる理由は、アートが地域に結びつくことで、地域が動き始めることへの大きな可能性があるから。産業に貢献したり、人々がつながったり、土地の記憶を呼び戻したりすることなどにつながると感じています。

榎本市子（以下、榎本）…地域のアートプロジェクトを取り上げる連載「ローカルアートレポート」では、どのようにプロジェクトが行なわれ地域に影響を与えているのか、また地域のどんな人と一



コロカルが編集した『完全コンプリートガイド 札幌へアートの旅 札幌国際芸術祭2017公式ガイドブック』(左)。本書で伝えきれなかった魅力は「コロカル」ウェブサイト(右)で詳しく紹介した。

緒につくり上げているのか、という視点で編集しています。現地の人や作家自身に書いてもらうこともあります。

メディアのつくりかた

及川…コロカル編集部は自治体や企業との共創による外部メディアにも関わっています。地域のワークショップなども行なうことがあります。ここではメディアをつくるときの指針として次の「三つの軸」で考えることを提案しています。まずは一つのテーマがある程度のボリュームで取り上げる「特集」。次に定期的に発信できること、発信したいことを考える「連載」。そして、そのメディアに必要な「カテゴリー」です。メディアをつくるときは、これらの軸を参考にしていただけだと思います。

コロカル編集部（編集長：及川卓也〈おいかわたくや〉／副編集長：榎本市子〈えのもと・いちご〉）

マガジンハウス社が発行するウェブマガジン「コロカル」。日本の「地域」をテーマに2012年1月運営開始。

ローカルアートレポートを企画する

コロカル編集部員になったつもりで記事の企画を考えるグループワーク。
及川さんと榎本さんより課題が出され、グループごとに取り組み、発表しました。

WORK

アートプロジェクトのどの部分伝えたいかを考えましょう。それを達成するにはどういう人に取材すれば良いか、どうい写真が必要かを考えてください。

IDEA (1) 連載企画「アートプロジェクトのど真ん中に住んでみる」
アートプロジェクトが行なわれているまちに移住したい人を公募し、その人がインタビューになって地元の人や先輩移住者に話を聞く。アートを切り口にして、まちの魅力に迫る記事をつくりたい。

COMMENT by colocal
いわば「一般人・イン・レジデンス」ですね。外部メディアでは発見できないような、住むことで見えてくるものがあると思います。ハードルは高いですが、まちの良さを表現できればいい記事になりそうです。公募よりは、移住をしたいと真剣に考えていて、まちやアートの価値が分かる人をお願いしたほうがいいのかと感じました。

IDEA (2) 「アートプロジェクトにつながるための食べる行為にフォーカス」
いくつかのアートプロジェクトを横断的に取材する案。アートプロジェクトが開催される地域の食を取材し、アートプロジェクトを巡る旅や地域の食文化に注目。芸術祭の概要、アートプロジェクトに関係がある食文化、アーティストの地域の食に対する感想などの記事を想定。



COMMENT by colocal
面白い企画ですね。「アートプロジェクトを食べる」というタイトルにしたほうがいいのかと思いました。一つの記事よりもシリーズにして、例えば vol. 1 で横浜、vol. 2 で札幌などと展開していくのはいかがでしょう。それから開催前に告知として発信するか、レポートとして書くかでも変わってきますね。

IDEA (3) シリーズ「芸術祭を支える人たち」
アートプロジェクトを支えた人たちにフォーカスする記事。芸術祭を支える「地域おこし協力隊」や地域の漁師さん、ワークショップに参加した市民などが取材対象。テーマはそれぞれの回ごとに設定したい。

COMMENT by colocal
コロカルの記事としていいですね。無理にアートに結びつけなくてもいいと思います。地域はバラ色に素晴らしい、という表現ではなく、リアルなものとして伝えられそうです。

FEEDBACK

近年、アートは「体験」に価値が置かれるようになりつつあります。ウェブや冊子などいわゆる読書の「体験」。編集の仕事は、情報を整理するだけではなく「実際に行ってみよう」と思うような心に響くものをいかにつくるかが大切です。また、コロカルはニッチな場所やプロジェクトを紹介することもあります。ニッチなものでもその価値が表現できれば、読者にとって一つの体験になるのではないのでしょうか。みなさんもそうしたことを意識しながら、制作やプロジェクトに向かっていけるといいと思います。(及川・榎本)



出版と編集で伝えられること

大衆に伝える出版物と、小さなコミュニティをつなぐローカルメディア

影山裕樹〔編集者／千十一編集室〕

雑誌の編集部や出版社勤務の経験から説く、出版物の在り方とは。そして近年の出版業界における変化とローカルメディアという新たな可能性について、編集者の影山裕樹さんが紹介します。

商業出版物の編集

紙媒体の編集には、「遅い編集」と「早い編集」があり、遅い編集は書籍やドキュメント、報告書等、早い編集は雑誌や新聞等の定期刊行物の編集を指します。

「遅い編集」である書籍の編集において重要な「企画」「編集」「広報」のうち、企画のプロセスをお話ししたいと思います。まずつくりたい本の類書について、書店の棚や売上データなど、得られる情報をフル活用してリサーチし、マーケティングをします。社内の会議にかけ、時には書店員と議論をしながら企画を練り上げます。ある程度練り上がったら、今度は読者層をより具体的にしていきます。年齢層や職業、趣味などでメインターゲットを絞り、加えてサブのターゲットも想定し、層を積み上げ、何部程度売れるかを想定したうえで、初めて本のタネができあがります。でもここ

まできたら、本はもう8割方できあがったようなもので、あとは一生懸命編集して形にして、広報していくだけです。読者層の積み上げには、社会学者によるマトリックスなどさまざまな手法を用いますが、みなさんが考える場合には、まずは自分がどんな層に属するのか考えてみてください。料理が好きな人が発明したキッチングッズが大ヒットしたりしますよね。自分と読者が近ければ近いほど、より具体的で、解像度の高い企画が生み出せます。

重版出来⇨大衆に届くこと

書籍出版の成功の基準は、どれだけ重版を重ねられたかということにあります。重版を重ねることは、当初予想したメインターゲット数よりも売れた、より多くの人に届いたということです。そのためには著者ではなく、読者を第一に考える必要があります。発信側の思いが先行しすぎた事例が、アートの業界には多いのではないのでしょうか。同質的なコミュニティのなかで受け入れられるものをつくるだけでは大衆には届きません。不特定多数の大衆を対象にした、書籍と雑誌という二つの世界が日本の出版業界を牽引し続けてきました。大衆の欲望をいかに拾い、売り上げをあげるかが、商業出版のセオリーであり、そのコンテンツを考えることが編集者の仕事だったのです。

編集という仕事の変化

ところが、インターネットの普及とともに次々と雑誌が廃刊になり、出版社や書店の倒産も続き、今商業出版は危機的状況にあります。そんななか、僕が興味を持っているのが「ローカルメディア」と呼ばれるものです。なぜかという点、僕は2011年の東日本大震災を経て、それまで以上に東

一人でつくるフリーペーパーから行政発行の媒体まで

ローカルメディアのいろいろ

影山裕樹さんが編集した『ローカルメディアのつくりかた』のなかから、4つの例を紹介。

1.

全国から愛される行政発行の『雲のうえ』



北九州市発行のフリーペーパー。創刊号で「角打ち」(酒屋で提供される酒を飲むこと)を特集したことで話題に。同誌を応援するファンクラブまで存在するほど人気。

編集委員を外部に設け、ありがたい自治体の発行物とは一線を画する。

題字=牧野伊三夫/写真=齋藤圭吾/アートディレクション=有山達也

3.

市民団体による『本と温泉』



温泉の若旦那の集まりである城崎温泉旅館経営研究会が立ち上げたNPOが発行。コンテンツも装丁も魅力的だが城崎温泉(兵庫)に行かないと買えない

ため、この本のために訪れる客も。流通先を限定することで人の移動を促す、メディアによる新たな実践。

2.

地元企業の『La collina』



滋賀・近江八幡市の和菓子「たねや」と洋菓子「クラブハリエ」発行のフリーペーパー。企業が発行するPR誌は、商品や自社に関する紹介が多いが、同誌

では地域の祭りや風景、まちの人などを取り上げている。地域の魅力を伝えることが自社のブランディングツールになっている。

4.

一人でつくる『みやぎシルバーネット』



シルバー世代をメインコンテンツにした月間のフリーペーパー。20年以上続くが、編集はもちろん、広告営業、取材、執筆、デザイン、発送も全て一人で担う。毎月1000句ほどの応募があるという「シルバー川柳」を通し、お年寄り同士が交流を始めた。

良いローカルメディアとは？

①“よそ者”と地元の人と一緒につくる

地元の人だけでは、しがらみや上下関係がある。よそ者だけでも、その土地の魅力が見えてこない。地元の人たちとよそ者が車座になってつくることが重要。

②身の丈にあった規模でつくる

制作の人数が増えることで、つくる目的が売上を伸ばすことに終始する恐れも。地方は読者数も少ないため最小限の運営費で続けることが、本分を失わずにいられる秘訣。

③アウトプットよりもプロセスを大事にする

近所のおじちゃん・おばちゃんのインタビューが面白ければ、芸能人が登場しなくてもいい。毎月楽しみにしている地元の人や、そこで生まれる新しいコミュニティのほうが大事。

京を中心としたメディア業界に疑問を抱くようになりました。一方で、ローカル(地方)での情報発信が活発化した印象を持ったのです。積極的な企業や自治体が目立ってきたり、すぐユニークなメディアが出てきたり。

また、企業が自社の顧客ニーズに近い情報を届けたら、自治体などが地域の情報を発信したりするものは「オウンドメディア」とも呼ばれています。新しい顧客の開拓につながる大きな目的です。それまで出版社の専門的なスキルだった「編集」という仕事が、こうして多様化しています。あらゆる業種にとって必要で重要なスキルとなり、かつコンテンツだけではなく、メディア自体をつくる仕事へと変化しているのです。

影山裕樹(かげやま・ゆうき)
東京都生まれ。早稲田大学卒業後、雑誌編集部、出版社勤務を経て独立。美術書、カルチャー書の企画・編集のほか近年は各地の芸術祭やアートプロジェクトに編集者、ディレクターとして携わる。著書に『大人が作る秘密基地』(DU BOOKS, 2014年)、『ローカルメディアのつくりかた』(学芸出版社, 2016年)など。

内側で練って生まれる言葉

どんな立場に立つかで紡ぐ言葉も変わる

中田一会「広報コミュニケーションプランナー／個人事務所「きてん企画室」主宰」

コミュニケーションプランナーとして活動する中田一会さん。

インハウスの広報として組織のなかから

外に向けて情報を発信する方法や、そのポイントとは。

コミュニケーションデザインという立場から紡ぐ

言葉を紡ぐとき、ついどのような言葉を紡ごうかとはかり考えてしまいましたが、どのような立場から、誰に対して紡ぐのがとても大事です。アートプロジェクトでいえば、事務局、参加者、研究者、批評家、外部のライターやメディアなど、それぞれの対象や目的によって語る言葉も変わります。私はインハウス（組織内の）広報を担当する立場として「プロジェクトの内側から言葉を紡ぐ」をテーマにお話をさせていただきます。

私はアーツカウンシル東京が実施している「東京アートポイント計画」のプログラムオフィサー兼コミュニケーションデザイン担当として勤務しています（2017年時点）。私なりの定義ですが、コミュニケーションデザインとは「戦略・事業・発信の間にある温度差を正しく感知し、全体のバランスを図るためのアクションに落とし込むことで、組織・事業が信頼してもらえる状況をつくる仕事」ではないかと思っています。つまり事業を展開するうえで「いっていること、やっていること、考えていること」がずれないようにするための調整役です。広報を外部に委託する場合もあると思いますが、特に「東京アートポイント計画」は実験的なプロジェクトが多く、自分たちで価値化し言葉にしなければ伝わらない部分も多くあります。ですのでチームのなかと外をチューニングする役割を主に務めています。

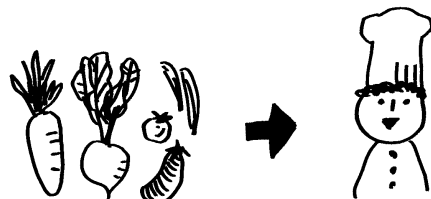
コミュニケーションデザインの仕事

私にとつての「言葉を紡ぐ」は、自分で書いたり、誰かが言葉を発する状況をつくったり、それを外に向けて届けることです。そのために考えたり、素材を集めたりすることも含まれます。仕事について整理すると、おもに5つの基本所作をぐるぐると回しているといえます。

まずは「1. ポテンシャルを探る」。特に最初の1年は東京アートポイント計画のどこに独特の言葉や専門性があるのだろうと、ずっと考えていました。たとえば、東京アートポイント計画の仕事そのものの独自性。また年に数十冊も発行しているドキュメント。これらの使い方や届け方をもっとうまくできないだろうか、と感じました。その気づきをリスト化し、今後やるべきことをチームで話し合うのが「2. 戦略を考える」です。年度ごとの目標と発信したいイメージを定め、そのために必要なタスクリストをまとめた戦略シートをつくりました。そして「3. 施策を実施する」。たとえば、東京アートポイント計画を紹介する配布用のパンフレットを新たに制作しました。また、各アートプロジェクトで毎年発行している冊子も、コミュニケーションをとりながら配布したり、

素材とは？

コミュニケーションの材料となりうる画像やテキスト、そのほか情報のこと。



野菜(素材)を料理(編集)する

イベントに合わせて読んでもらう機会をつくったりしています。冊子を文化関係者にまとめて送るときのパッケージも、デザイナーや編集者とともにリニューアルしました。その結果SNSで写真がアップされる、感想メールが届くなど、以前よりも多様な反応をいただけるようになりました。次の所作は、「4. 表現を調整する」こと。ネット記事やメールニュースなど、プログラムオフィサーが書いた原稿を私が確認し、大事な部分がどこなのかをチーム内で議論するプロセスも重視しています。また、情報を出すだけで終わらず、「5. 繋いだ手を離さない」というのが最後の所作です。イベントに来てくれた人にメールニュースを届けたり、いただいた名刺をデータ化して次回の案内につなげたりと、データベース運用を軸に興味を持ってくださった人との関係を継続する活動です。

伝えるための素材集めがポイント

組織のなかと外を紡ぐ際に特に大事だと感じているのは、コミュニケーションのもととなる文章や画像、

映像などの「素材」をどこから見つけ、誰に、どんな形で届けるかを戦略的に考えることです。素材が「野菜」で、編集して発信することが「料理」だとしたら、素材の目利きができる腕のいい料理人になることが広報の要。畑から獲った野菜をそのまま出すのではなく、个性的に組み合わせ、季節やタイミングを見計らってお客さんが「おいしい」と思える形に仕上げていくことが重要です。

そして、その結果を見届けてチームにフィードバックします。良いリアクションの内外への共有や、悪いリアクションへの対応も大切です。アートプロジェクトの広報を考えたととき、イベント等の告知のみならず、その背後にある文脈やプロセスなどを発信することも重要ですが、言語化が難しいケースも多いのではないのでしょうか。なのでいきなり「チラシをつくらう」「パンフレットをつくらう」と制作に入るのではなく、その事業を社会的に認知してもらうにはどうすればいいかを考えることが大切だと思います。そのためには、チーム全体でそもそもの目的を議論することも大事ですし、出せる「素材」をすべて並べ、眺めることもヒントになります。組織の内側から言葉を発する広報は、内部でしっかり考える機会をつくることも仕事なのではないかな、と、考えています。

※1 アーツカウンシル東京が、東京都とNPOとの共催により実施している事業。地域や社会課題に根ざしたアートプロジェクトの運営を通じて、人材の育成や活動基盤を整備する中間支援事業として展開。

中田一会（なかつか、かずえ）

1984年生まれ、東京都出身。武蔵野美術大学を卒業後、I-T関連出版社のIR/編集、株式会社ソフトラボワークの広報PRを経て、2015年よりアーツカウンシル東京に所属。東京アートポイント計画やTokyo Art Research Labのプログラムオフィサー兼コミュニケーションデザイナー担当として勤務。2018年4月、独立。



3章

体験で紡ぐ

アートプロジェクトの伝え方はさまざま。

ここでは作品を巡るツアーなどの実践例から

紡ぐ方法を学びます。

案内人としての心得 とことん歩いて、五感で知る

嶋田昌子〔NPO法人横浜シティガイド協会副会長〕

ガイドツアーを行なうために、ガイドが知っておくべきことは？

長年横浜でシティガイドに携わってきた嶋田昌子さんから、知識ではなく

自ら歩いて感じたことを伝えることの大切さ、ガイドツアーの心得を聞きます。

観光客だけではなく、住人にも向けたまちのガイドを

横浜は開国・開港という流れのなかで、人口400〜500人くらいの小さな村が突然開港場に指定され、大都市に発展したという面白い歴史があります。今でこそ人口370万人ですが、江戸時代より前から横浜に代々住み続ける人は少なく、市民ですら意外と横浜を知りません。そこに注目して1992年に生まれたのが「NPO法人横浜シティガイド協会」です。観光客だけではなく、市民にも向けて横浜を勉強しよう、と立ち上げました。初めは参加者ゼロでしたが、やがてリピーターも増えました。今では年間1万人くらい参加者がいますが、その半数が横浜に住むリピーターです。

ガイドの勉強は、とことん歩く

シティガイドがどんな勉強をしているのかというと、とにかくとことん歩きます。例えば、みなとみらい線の日本大通り駅から横浜スタジアムの付近まで200メートルくらいありますが、高低差は1・6メートル。この高低差は横浜村の土地がもともと長い砂州だったことに関係しています。意識しないと普通は分かりませんが、私たちガイドは歩いているので分かるんです。五感を使ってとことんまちを歩く、歩いたら少し歴史を勉強してまた歩く、とくり返すうちに話の種を膨らませられるようになります。

私が尊敬する一人に民俗学者の宮本常一みやもと つねいち氏みやもと つねいちがいますが、彼の父親は「よそのまちに行ったら、まずそのまちの一番高いところに行きなさい。まちを見下ろして全体を見なさい」と言ったそうです。「どこに山や川があり、どこに人々が住んでいるのか。そして人々の



嶋田昌子さんのガイドツアー「バリアフリー散策2018」。 Photo: NPO法人横浜ジェントルタウン倶楽部

ガイドのポイント

・部屋の隅で話す

「大きな声で話す」はガイドの基本ですが、私はあまり大きな声ではないので部屋の隅に立ちます。そうすると壁に囲まれるので、私の声みなさんのほうに広がっていきます。街なかで話すときも壁を背にして話すと、お客さんに声が届きやすいです。

・お客さんを寄せて話す

例えば、展示で作品の説明をする場合、「この作品をご覧ください。もう一歩前に出た方がいいですよ」と言ってお客さんを作品の前に寄せます。そしてガイドは後ろから話すと声を通ります。

・ゆっくり話す

参加者は若い人ばかりではないので、ゆっくり、はっきりと話しましょう。

・参加者にも話してもらう

参加者のなかに物知りな方がいる場合は、その方にも話してもらうのもいいでしょう。「先生」と呼んで出番を用意することもあります。さまざまな方がいるので臨機応変に対応しましょう。

・同じ場所で話が長くないように

人は立ったまま同じ場所で3分間、話を聞いていると体が揺れ出します。3分以上どうしても話したいことがあるときは「見る角度を変えましょう」と移動するだけでも違います。

書き言葉と話し言葉は違う

具体的なガイドのコツを紹介します。「聞く・話す」という言語体系と、「書く・読む」という言語体系は違います。まず、文章に書いて覚えることはやめましょう。事前にテキストはつくっておきますが、短い文章にするといいでしょう。主語と述語、分かりやすい100字程度の文章の羅列が、ガイドには役立ちます。

そして理解しやすい順番を心掛けてください。時代順だったり、もしくは全体から細部に入った。例えば、私たちがよく紹介する山手の西洋館でしたら、建物の上から順に、煙突、瓦、壁、ドアと説明すると、聞く人たちは視線をそらしません。アーティストの作品を紹介するときも同じで、まずは全体を話してから特徴的な細部に入るといいでしょう。

嶋田昌子（しまた・まさこ）

1940年神奈川県生まれ。1982年、後の「ヨコハマ洋館探偵団」を創立、県の支援で『横浜フランス瓦物語』を刊行。1992年、横浜シティガイド協会を創立。横浜ボランティアガイド協議会会長。2003年にNPO法人化し、「かながわ観光大賞」（2011年）受賞。個人として「横浜文化賞」（2012年）、「男女共同参画貢献賞」（2017年）受賞。

もっと知りたい、ガイドのコツ

嶋田昌子さんはどのようなことに気をつけながら、ガイドをしているのでしょうか。

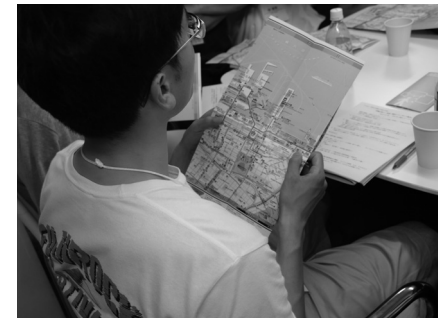


受講生1: 何度も歩き回ることですれまで気づかなかったものに出会えた経験はあります。そうした偶然の産物としていろいろな発見をされているのでしょうか？ まち歩きノウハウがあれば教えていただきたいです。

嶋田: ノウハウはありません。ひたすら歩いて、相手の世界(まち)に入り込む。誰かに話して伝えるためにはいろいろと知らなければなりません。私たちのメンバーは必ず、ガイドをする前に下見を2回します。ただ、お店の下見のときに何も買わなかったりすると、私は「観光先で何も買わない人はいないでしょう」と言っています。買ったり食べたりも含めて、そこに身を沈めるような感覚で入ることが大事です。

受講生2: ツアーの参加者に何を持ち帰ってもらうか、といったテーマなどはどのように意識されているのでしょうか？

嶋田: ガイドの方針などは企画段階で決めて、コースもそれに沿うようにします。「横浜を歩きましょう」なのか、「ヨコハマトリエンナーレを見ましょう」なのか、「若手作家の活動をのぞきましょう」なのか。一般的な旅行ガイドとどのように差をつけるかとストーリーを考えます。まわるもの・まわらないものを選びます。「まちの背景をアートで知る」といったテーマなら、まちの歴史が感じられる場所を見せると、アートがそこから立ち上がっ



ていることを語る手立てになります。そうした狙いやストーリーはぜひ最初に伝えましょう。なぜこのルートを歩いているのか、理由が伝わっていないと不親切と捉えられることもあります。

どのように伝えるかを模索する 人を介して伝わるストーリー

松田雅代「NPO法人BEPU PROJECTアートプロジェクト事業部統括」

地域で開催する芸術祭やトリエンナーレなどのプロジェクトでは、一つの作品が設置されるまでさまざまなストーリーが生まれます。
一人の言葉では足りない、大きなプロジェクトを他者と共有するためには。

作品の背景にあるストーリーを伝える

私の所属するNPO法人BEPU PROJECT(ベッププロジェクト)は、大分県別府市を中心に活動しています。2014年は、同県の国東市くにまきと豊後高田市ぶんごたかたで開催された「国東半島こくとう芸術祭」でも企画制作・運営を担当しました。山深い場所に作品が展示されたこともあり、バスツアープログラムをたくさん用意したのですが、そのツアーを考えるとときに大切にしたのは、作品と地域の関係やそこで生まれたストーリーをいかに伝えるかということです。そのなかからアントニー・ゴームリーというイギリスの作家のエピソードを紹介します。

ゴームリーの作品は、千年以上続く山岳修行のルートに選ばれたこともある場所に設置されまし



右/アントニー・ゴムリー「ANOTHER TIME XX」(大分、2013年) Photo: 久保貴史 © 国東半島芸術実行委員会 左/アントニー・ゴムリーのガイドツアーを考えるミーティング。

た。土地の所有者や近隣住民には事前に説明し、承諾は取っていたものの、一部の地元住人や修験者から設置に反対する声があがっていました。作家は場所の持つ意味や歴史を理解した上でここに設置することを希望したのですが、主催者の説明不足もあり、反対の声について大きく報道される事態になりました。作品はどうか設置できることになったものの、630キロもある彫刻を断崖絶壁のような場所に運ぶことは困難でした。設営のスペシャリストとともに検討したヘリコプターでの設置案も難しく、途方に暮れていたところで見つけたのが、地元のしいたけ農家と建設会社。この方々はしいたけの原木栽培に使う木を山から運ぶための索道技術を持っていたのです。そして設置は成功しました。

地元の反対はあったけれど、地元の方で設置ができた。この作品を持つストーリーをお客さんに伝えたいと思い、ガイドを担うボランティアさんと対話を重ねながら伝え方を考えました。私は当初誰でも話せるようにそのストーリーを紙芝居にしたのですが、ボラン

ティアさんたちは徐々に、作品の背後に隠れた物語をそれぞれの言葉でお客さんに伝えてくれるようになっていきました。

ツアーという伝え方

一方、別府市で開催していた「混浴温泉世界」^{※2}は、2015年の最終回に、それまでのいわゆる自由鑑賞型のスタンプリーパー形式から、案内人付きで完全予約制のツアー形式に鑑賞方法を変えました。1時間半ほどでまちを巡りながら作品を見るのですが、やはり案内人の存在が肝になります。案内人をつとめるみなさんは、每晚ミーティングを開き、どうご案内すべきか議論を重ねていました。私から伝えたのは作品のコンセプトのみ。「このツアーは時間の変化が大切だから、このタイミングで立ち止まって空を見上げよう」など、案内人同士でアイデアを出し合い、会期中もブラッシュアップしていきました。

伝え方を一緒に考える

2016年からは、毎年一組のアーティストに焦点を当てる「JUBBUD」という個展形式の芸術祭を開始しました。1年目は「目ヲBegu」。市役所の建物全体を使った作品で、市の全面協力により実現できました。通常業務が行われている市役所内を巡りながら鑑賞する作品だったため、できる限り業務の妨げにならないようツアー形式でご案内することにしました。ご案内したのは「混浴温泉世界」でも活躍した案内人の方々です。作品についてほとんど説明しないなど、演劇的で特殊な案内方法だったのですが、案内人のみなさんのアイデアでツアーそのものを一つの作品として

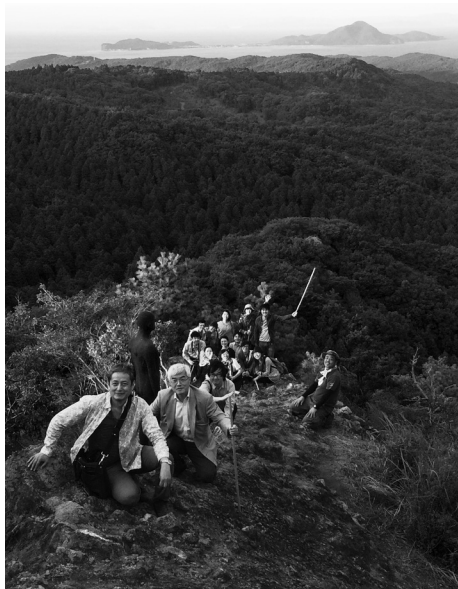
アントニー・ゴームリー《ANOTHER TIME XX》を紡ぐツアー

芸術祭が終わったあとも、
作品が土地を紡ぎ、ツアーが作品を紡いでいきます。

ゴームリーの作品については、作品に辿り着くまでのルートも提案しました。最寄りの駐車場からなら徒歩10分ですが、私たちが推奨したのは、約70分かけて山道を登るコース。作品が立っている千燈地区は、国東半島の歴史を語る上でとても大切な場所です。そのコースを歩くことで、作品設置にまつわるストーリーのベースにある、半島の歴史や重要なポイントを体感できます。長い道のりを経て作品と出会うと「歩いた意味が分かった」と、みなさん意図を理解してください。

この経験が発展し、アートガイドの案内で国東半島をめぐるツアーも造成しました。このツアーは少人数制で、作品と地域をより深く体験していただけることが特徴です。農家さんのご自宅で手料理を振る舞っていただいたり、お寺での護摩焚きや地元の食体験など、国東半島ならではのコンテンツをご用意しています。このツアーは今も、BEPPU PROJECTに問い合わせをいただければ我々がコーディネートをして、旅行会社を通じて販売することができます。

先日もガイドツアーを久しぶりに実施しました。行政の担当者や地元のボランティアガイドさんと私の3人でガイドをしたのですが、改めてこのツアーはキラコンテンツだなと感じました。まず行政の担当者が、国東半島が過疎化していく現状やこれからのこと、生活、暮らしについて語り、次に地元の方が、国東半島にまつわる古い歴史や仏教のことを語り、そして私はアートのことを語る。三者がそれぞれの視点で過去、現在、未来のことを語り、そのなかではアートも特別なものではなく、暮らしや歴史と同等に扱われることになる。そういったツアーになっています。



アントニー・ゴームリーのガイドツアー。

高めていただきました。案内人の多くは年齢も若く、アートやもののづくりが好きで別府に移住してきた方もいます。作品を見ることや伝えることの経験値を積んでいますし、むしろこちらが気づきを得る提案も多くありました。伝えるために大切にすべきことをみんなで考え、一緒に成長させてもらっています。

- ※1 大分県国東半島で開催された芸術祭、約30組のアーティストが参加。総合プロデューサー＝山出淳也／会期＝2014年10月4日～11月30日／場所＝大分県豊後高田市、国東市各所／主催＝国東半島芸術祭実行委員会。
- ※2 大分県別府市内各所にて、3年に1回開催されていた芸術祭。2009年、2012年、2015年に開催された。総合プロデューサー＝山出淳也／総合ディレクター＝芹沢高志／主催＝別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」実行委員会。

松田雅代（まつだ まさよ）

1984年兵庫県生まれ。京都精華大学芸術学部卒業。ディスプレイ関連会社の営業職を経て、2012年よりNPO法人BEPPU PROJECT「勤務。別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」(2012年、2015年)をはじめとしたフェスティバルの運営企画制作、学校や福祉施設でのワークショップ、イベントの企画など、表現ジャンル、現場を問わず幅広く担当する。

地元から紡ぐアートガイド

地域のガイドさんとともにつくる「国東半島芸術祭」のツアー

嘉原 妙「アーツカウンシル東京プログラムオフィサー」

NPO法人BEPPIU PROJECTで「国東半島芸術祭」を担当していた嘉原妙さん。

地元の方々のガイドで進行する、長時間のツアーが好評でした。

その準備や実践で重視したことを嘉原さんから聞きます。

ガイド自身の作品の受け取り方を大事に

前職では松田雅代(89頁)さんと一緒に「くにま国東半島芸術祭」(以下、芸術祭)を担当していました。ツアーは基本的に二人一組になって一つのツアーを担当。もともと国東半島でガイドとして活動されている地元の方と、芸術祭のスタッフの二人です。ツアーをつくるにあたり、地元のガイドさんと一緒に準備にかけた期間は3〜4カ月。ガイドさんには、準備段階に作品制作の現場でアーティストと直接交流し、アーティストの考えや作品を知ってもらいました。例えば宮島達男みやしまつおさんの「成仏プロジェクト」は2日間のワークショップを経て制作されましたが、両日とも参加していただき、その経験はとても心に響いたという感想もありました。

ツアーでは、地元のガイドさんが作品や国東半島について話し、スタッフはタイムキーパー役。

必要に応じて補足説明をします。芸術祭のスタッフがあまり作品について話さないようにしたのは、ガイドさんそれぞれの作品の受け取り方を大事にしたいと思ったからです。また、県外のお客さんが多かったこともあり、国東で長年暮らした方が、作品に出会って感じたことを語った方が、お客さんの印象に深く残るだろうと思いました。

ツアーで気をつけた、実践のポイント

本番のツアーで気をつけたことをお話しします。まずは「自己紹介」。初めて会う人たちが一緒に山を登り、半日を過ごすのですから、自己紹介が信頼への第一歩です。次に「安心安全」です。国東半島はトレッキングコースのようなルートや、一步踏み外したら崖から落ちてしまうような場所があり、けがと隣り合わせでした。しっかりと注意喚起すること、万が一けがが出たら落ち着いて対処することなどに気をつけました。ことの大小にかかわらず主催者に連絡をきちんと入れること。そして何よりツアーは「食事」が大事。その土地の食材で季節ならではの食事をいただけるのは、ツアーの楽しみの一つです。食事の良し悪しで印象が左右するといっても過言ではありません。

ツアーは天候や各会場の状況によって予定と異なることもしばしば。だから、時間変更も想定した進行管理は重要です。説明の際は自分のペースで話さず、参加者の様子をみながら調整します。芸術祭のツアーでは、作品だけでなく史跡も巡りました。ガイドさんのなかには歴史に詳しい方が多く、お話がとめどなく続くことがあるのですが(笑)、タイムキーパーを担う私が「そろそろお時間です」などとお声がけしていました。ただ、せっかくここでしか聞けないお話なので、バスの



川俣正の作品「説教壇」(国東半島芸術祭、大分、2014年)の前で説明をするボランティア。16世紀に国東半島に生まれ、日本人として初めてエルサレムを巡礼した司祭、ペトロ・カスイ・岐部にちなんで制作された作品。

なかでも続きを話してもらいました。

ガイドツアーの質を高めるために

ツアーの質を高めるには何のためにやるのかを理解し、やりっぱなしにせず更新し続けることが重要だと考えています。企画段階では、芸術祭の趣旨とツアー内容があっているかを確認しながら、つくり込みをしていきました。ツアーの実施前には、全員でリハーサルを行ないます。顔見知りのメンバーだけだと緊張感がないので、お客さん役として一般の方にもご協力いただきました。ツアー後は、毎回必ずガイドさんたちと振り返りの時間を持ちました。メンバー間で共有しているガイドのマニュアルは、作品までどのようにして参加者をご案内するかや、バスの車窓からみえる国東半島ならではの風景についてふれてほしいなど、大切にしたい視点を書き込み、ガイドさんのお守りになればいいなという思いでつくりました。そして、日々の気づきを書き込むなど、最終日まで常に更新し続けました。

どのように作品に向き合うか

ガイドさんは芸術祭の仲間でもあり、芸術祭を受け入れてくれた地域に住む人でもあります。ツアーを通して「アートのこととはわからないけれど、この作品が好き」「作品をみて昔のことを思い出した」など、それぞれのガイドさんのなかに作品が根付いていくのを感じました。それは案内をする側にとって大事なことだと思っています。

また、ガイドさんたちから、作品の見方についてよく質問をいただきました。そのときは「作品の解釈は一つではないし、感じられたことは間違いではないと思います」とお答えしました。自分の感じ方に自信が持てない作品や、好きになれない作品は「どうやってガイドすればいいのだろう」と迷うこともあります。まずは自分の感想をお伝えして良いと思います。そのうえで「みなさんはどう思いますか」と対話してみる。いろいろな人の意見や視点が入ると印象が変わるはず。ささやかな変化を観察するその積み重ねが、作品と向き合うことなのではないかと思っています。

嘉原 妙(よしはら たえ)

1985年兵庫県生まれ。大阪市立大学大学院創造都市研究科(都市政策学)修士課程修了。在学中より、企業メセナ協議会インターン、現代アートを中心に展覧会や美術鑑賞教育プログラム、アートプロジェクトの企画運営に携わる。2010年秋よりNPO法人BEPJU PROJECTにて、地域をフィールドにさまざまなアートプロジェクトの運営を経験。2015年4月より現職。

「こえび ガイドツアー」 in大島のポイント!

①伝え方

ガチガチのマニュアルはつくらない。
ガイドする隊員が独自にエピソードを
付け加えて、等身大で伝える。

②立場

芸術祭のボランティアならではの視点で、
大島について伝える。

③OJT

まずはデビューしてみる。そして、大島と時間をかけて関わりながら、自分が感じたことや、入所者の気持ちを汲み取って言葉にしていける。入所者との関係がガイドに現れる。



大島でのこえび隊によるガイドツアーの様子。

手づくりのラジオ番組「大島アワー」



ハンセン病の後遺症で、目が見えない人や弱視の人、介助なしでの外出が難しい人も楽しめるものとして、高松市主催の事業で2015年から開始。約15分間の番組を月1回、園内で放送している。笹川さんも準備段階から中心となって関わり、毎月のインタビューやリポートを担当。「趣味やクラブ活動などの話を伺っています。ラジオ番組なので、なるべく楽しいお話を伝えたい」と、笹川さん。明るい話題を引き出せるのも、長年にわたり多くの入所者と交流し、信頼関係を築いてきたからこそ。

した。マニュアル以外のエピソードは、こえび隊自身の言葉で伝えます。私が知らないエピソードを持っていることもあります。一人ひとり、大島で出会う人やコトが全く違っていて面白いんです。

大島青松園でも施設見学や人権学習を目的に訪れた方にガイドをしています。ハンセン病の歴史を正しく伝える部分は同じですが、芸術祭やこえび隊の活動を通して出会ったお話をするのはこえび隊のガイドならでは。そういう内容もこえび隊ガイドの特徴ではないでしょうか。

笹川尚子（ささかわ・しよこ）

1984年香川県生まれ。「瀬戸内国際芸術祭2010」以前からこえび隊に参加し、ハンセン病療養所の大島青松園がある大島で、ガイドツアーの企画などを担当する。その後も継続的に大島に通い、2013年から同職員。2015年9月からは、園内向けのラジオ番組「大島アワー」（高松市主催）の制作に携わる。

横浜で活動するクリエイターやアーティストに話をきく！

Photo: 加藤甫 (102~103頁)

WORK

「アート」と「地域」に出会うツアーを企画しよう！

まちづくりに文化芸術の視点を取り入れる「創造都市」という考え方に、取り組んできた神奈川県横浜市。アーティストやクリエイターも多い横浜で、アートフェスティバル「黄金町バザール」を行なう黄金町をメインエリアに、アートを主題にしたツアーを企画します。ツアーを企画するにはそのまちを知ることから。まちを歩いたり、文献をあたりたりすることも大事です。ここでは横浜で活動する人たちに話を聞き、企画のヒントを得ました。

1 アーティストがいる町・黄金町

2008年から続く「黄金町バザール」では、「紡ぐ」ためにどのような取り組みをしているのでしょうか？ 黄金町エリアマネジメントセンターの水谷朋代さんに聞きました。

黄金町は常時50組を超えるアーティストがいるまち。さまざまな企画でその魅力を発信する試みをしています。なかでも「黄金町バザール」は会場数がとても多いので、ツアーは有効な手段です。特に会期中はツアーの種類が多く、ゲストキュレーターやディレクター、アーティスト、ボランティアサポーターなど案内人もさまざま。展示の会期以外にも、制作現場を巡るツアーなどを行なっています。作品やアーティストを巡るのではなく、提灯を持って商店を巡るナイトツアーをしたことも。ツアーによっては、

地域の方やまちを舞台に小説を書いた方など、よりまちに詳しい方にも案内人役をお願いしています。

ツアーのほかに企画を発信するプログラムとしては、トークイベントやアーティストによるワークショップなどはもちろん、より長期的なものだと、滞在制作を行っている場所に作品を置くパブリックアートプロジェクト、作品を近隣の個人宅や商店に貸し出して展示する「バザールコレクターズ」などがあります。アーティストを身近に感じられる企画を考えて実施しています。



水谷朋代(みずや・ともよ)

NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター アートプロジェクトマネージャー。

2

アートを支援する活動拠点「The CAVE」

アートの地下室をリノベーションし、アートスペース「The CAVE」を立ち上げ、運営を続ける石神夏希さん。補助金とはらず、株式会社を立ち上げ、スペースを維持しています。

ビルの地下室をリノベーションしたアートスペース「The CAVE(ザ・ケイブ)」を運営しています。私自身はこの運営以外にも、劇作家としてさまざまな地域で演劇作品をつくっています。建物自体は関東大震災の直後に建てられ、十数年ものあいだ空室でした。改修の際に現れた壁画やステージ跡は当時のまま残していますが、このあたりが横浜でも歴史



石神夏希(いしがみ・なつき)

劇作家、ペビン結構設計、NPO法人場所と物語 理事長、The CAVE 取締役。

の深い繁華街だったことを物語っています。私たちは、ここで株式会社をつくり、家賃収入でスペースを運営しています。10年以上前、横浜のクリエイターが集まる場所に部屋を借りていて、そこで出会った人々と民間の力でクリエイターを支援したい、とThe CAVEを始めました。

4

作品制作における地域性

1929年に銀行として建てられたビルを改修したYCCヨコハマ創造都市センター。この場所で個展(2017年)を開催した鬼頭健吾さんにも場所と作品制作についての視点を伺いました。



鬼頭健吾(きとう・けんご)

美術家、京都造形芸術大学芸術研究科准教授。

僕の拠点は東京ですが、横浜ではアートスペース「ZAIM(ザイム)」や「BankART 1929(バンクアートイチキューニークュー)」(向スペースとも閉室)などで展示をしたことがあります。横浜には古き良き飲み屋が多い印象があります。場所性や地域性を大事にしている作家もたくさんいますが、僕の作品ではその性質上できるだけ排除しています。ですが、こちらが意図しなくても、見る人がその時々

3 横浜ならではの建築の生かし方

横浜に建築事務所・オンデザインを構える、西田司さん。横浜の歴史ある建築を生かす方法を考えています。

私たちがリノベーションを手がけたビル「泰生ポーチ」はJR関内駅から徒歩数分。1階がカフェとイベントスペースになっていて、2階から4階まで十数組のクリエイターとアーティストが小さなオフィスを構えています。1階が会員制クラブだったこのビルをリノベーションするにあたり、開かれた場所としての使い方をみんなで考えていこう、というスタンスではじめました。このエリアには約40棟、防火帯建築というコンクリート造の建築があり、それらは戦災復興後、防火の基準が高くなったときに建てられたものです。近年リノベーションし、アーティストやクリエイターがシェアして活用する事例も増えています。



西田司(にしだ・おさむ)

建築家、オンデザインパートナーズ代表。

以前600枚のスケッチが風で動く作品をつくったのですが、設営日に東日本大震災が起きました。オープンは2週間ほど延期されましたが、作品を見た人は「津波みたい」と口々にいっていて。そういうところがアートの持つ不思議な力だと思います。

実践！2人でツアーを考える

- ▽課題テーマ 知り合いを横浜に連れて行く
- ▽メインエリア 黄金町(神奈川県横浜市)
- ▽ツアー時間 1日

これまでの講座や、地域で活動する方のお話を参考に、受講者が2人ずつのチームを組んで、ツアーを考えました。実施前にプレゼンテーションをし、横浜市芸術文化振興財団の杉崎栄介さんに講評をもらいました。

- 1 Aチーム
対象との距離感が異なる、2人でつくるツアー

Aチームは黄金町のリサーチ経験がある受講生と、今回初めて訪れた受講生のペア。前半と後半で担当を分け、違った味わい方ができるツアーを考えました。

● Presentation

歴史ある関内、映画のまち・伊勢佐木町、アートのまち・黄金町という3軸で考え、前半は「The CAVE」カトレヤプラザ伊勢佐木・横浜ニューテアトル前・シネマ・ジャック&ベティ前という流れです。参加者には事前に資料を配布し、少し予備知識を身につけてもらおうと考えています。後半では、先日実際に黄金町を歩いた印象から「間」というテーマを考え、それをベースに対話型でまちや「黄金町バザール」(2017年)を巡ります。

マにした作品など「間」を考えるものが多かったので、そういった作品を入りにしたいと思います。また黄金町の歴史にも「ちよんの間」という言葉があり、関係づけられたらと考えています。

● Review

前半は事前資料があるなど情報量が多いことが気にかかります。対して、後半は対話型ですから、参加のスタンスも前半と後半で多少変えていく必要がありそうですね。その説明を行なうかどうか、行なうならどのタイミングが適切か。後半の「間」というテーマの説明も同様に、企画側の思惑を伝えることやその伝え方もたらず効果を意識して考えてみましょう。



杉崎栄介(すぎざき・えいすけ)
公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 広報・ACYグループ。

各チームのツアーでたどる横浜界隈



- 2 Bチーム
映画のロケ地を巡りながら地元の人たちに話を聞く

黄金町を舞台にした映画のロケ地を巡るツアーを考えたいBチーム。地域の歴史にも触れるため、ツアー先での説明協力を検討しました。

● Presentation

金刀比羅大鷲神社からスタートし、コーヒーマツモト・横浜日劇跡地・シエアスタジオリ旧劇場」完ストリップ劇場を巡ります。横浜日劇跡地でシネマ・ジャック&ベティ支配人の梶原俊幸さん、シエアスタジオリ「旧劇場」ではリノベーションを手がけた永田賢一(かひらけんいち)さんに、以前のまちの姿や変化などを伺います。同様のロケ地巡りツアーとの差別化を図るため、自身の強みである営業経験を生かしてアプローチしてみたところ、お二方とも快諾してくださりました。後半の「黄金町バザール」では4つの作品を巡る対話型のツアーを予定しています。

● Review

人に会って話を聞く場合、気になるのは時間配分です。話すことはいくらでもある面白い方々なので、予定の時間はあっという間に終わってしまっただろう。せっかくなので、スポットを減らして話を聞く時間を増やすなど、調整したほうがいいと思います。後半の対話型作品ツアーでも前半の流れを汲み、作品数を減らして作家本人やキュレーターの話が聞けるポイントの一つも設けると、全体の統一感が出るのではないのでしょうか。【杉崎栄介】

〈杉崎栄介さんによる総評〉



シビックプライドを持ち、行程のなかに山場をつくる

時間配分など具体的に考えるべきポイントはたくさんありますが、ツアーを考えるスタンスとして、横浜に対するシビックプライド(市民の誇り)を検討してみてください。横浜に住んでいない方も住んでいるつもりになり、自慢できる場所を見つけ、そこを紹介する意識で取り組むといい

かもしれません。また瞬間的でも「すごくいい体験ができた」と参加者が思える瞬間をつくるのが大事でしょう。それは知識と理論ではないかもしれません。最初からすべてをうまくやろうとせず、どこかに山場をつくってそこを目指すようなイメージで組み立てるといいと思います。

「言葉を紡ぐ」「体験を紡ぐ」講座一覧

「ガイドダンス」

アートプロジェクトを「紡ぐ」

・2017年7月8日(土)

「混浴温泉世界」/「国東半島芸術祭」(大島の体験型ツアー) / 醬の郷+坂手港プロジェクト / 「さいたまトリエンナーレ2016」(「やじらじ」)の企画意図 / 「(「やじらじ」)の制作プロセスと協働者の視点/ゲスト 長島唯(トラマトワーク/翻訳家)、川瀬一絵(写真家)

「言葉を紡ぐ」

紡ぐための言葉を養う

・2017年7月22日(土)

「伝える」を考える
・8月5日(土)
アーティストの考えるアートプロジェクトとその紡ぎ方 / 体験型作品(「いちまいばなし」) 実演とその演出について / ゲスト 佐藤悠 編り部 / コロロ助平代表 / 御座屋家元 / 知ったかアート大学学長

・8月26日(土)

歴史を辿る、言葉を捉える
・8月26日(土)
1950年代からアートプロジェクトを巡る歴史を捉える / アートプロジェクトの言葉 : 「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を例に / 「取手アートプロジェクト」を例に / ゲスト 加治屋健司(美術史家 / 東京大学大学院総合文化研究科准教授)、羽原康恵(アーティスト)

・7月29日(土)

「体験を紡ぐ」仕事と領域を知る / 横浜創造界隈とアートプロジェクト / アートプロジェクトの現場で「コビー」のある風景を生み出す / ゲスト 石川孝(アーティスト) / エドワード・キチン(市民ガイドによるまち歩きガイドツアーの心得 / ゲスト 嶋田昌子 / NPO法人横浜シティガイド協会副会長)

・2017年7月15日(土)

実践例に学ぶ
・2017年7月15日(土)
小金井アートフルアクション《小金井と私密かな表現》における体験の紡ぎ方 / 《小金井と私密かな表現》を体験するワークショップ / ゲスト 山本サダワタル(文化活動家 / アーティスト) / 荒田諒(/ NPO法人アートフル・アクション / スタッフ)

・9月2日(土)

現場を体験する
・9月2日(土)

・9月23日(土)

メディア制作演習、自主企画・調査
紡ぎ方の多様性 : 場づくりの視点に学ぶ / 自主企画・調査 / プラン相談 / ゲスト 鈴木 郎太(株式会社と小レ取締役)

・8月26日(土)

ガイドツアー「知り合いを横浜創造界隈に連れて行く」実践
・9月22日(土)

ガイドツアー「知り合いを横浜創造界隈に連れて行く」実践
・9月22日(土)

・10月7日(土)

前半の授業の振り返り
「瀬戸内国際芸術祭」大島におけるガイドツアーの取り組み / ゲスト 笹川尚子(特定非営利活動法人瀬戸内こびネットワーク)

・11月11日(土)

言葉を紡ぐ実践 / 現場を体験する
・11月11日(土)

・12月23日(土)

修了課題の中間発表とフィードバック
「TERATOIEA祭り2017」ディレクターが生み出す言葉にふれる / ゲスト 小川希(TERATOIEA / チェレクター / Art Center Ongoing 代表)

・2018年1月20日(土)

通年の授業の振り返り / 修了課題の読み込みとグループディスカッション / 修了課題の発表と講評 / 修了式 / コメンテーター 多田智美(編集者 / 株式会社SOME代表、森司 / アーツカウンシル東京 / Tokyo Art Research Labディレクター / 東京アートポイント計画ディレクター)

・10月14日(土)

「横浜創造界隈を伝える」フリーペーパー制作企画会議 / 自主企画・調査 / プラン発表
フリーペーパー原稿制作 / 自主企画・調査 / グループワーク

・10月28日(土)

フリーペーパー原稿確認・改訂 / 自主企画・調査 / グループワーク
場づくり演習、自主企画・調査
・11月11日(土)

・12月2日(土)

「MOTサテライト」を紡ぐ / ゲスト 小高日香理(東京都現代美術館学芸員)
「TERATOIEA祭り」を紡ぐ
・12月16日(土)

自主企画・調査 / 中間発表 / 「TERATOIEA祭り」を紡ぐ
・1月13日(土)

メディア制作演習、場づくり演習

・2018年1月6日(土)

メディア制作振り返り / 「TERATOIEA祭り」を紡ぐ / 場づくりの実践 / コメンテーター 佐藤孝青(アーツカウンシル東京 / プログラムオフィサー)

実践例に学ぶ、自主企画・調査

・1月13日(土)

「国東半島芸術祭」におけるガイドツアー実践 / レクチャラー 嘉原妙(アーツカウンシル東京 / プログラムオフィサー)
自主企画・調査発表と講評 / 修了式 / コメンテーター 森司(アーツカウンシル東京)

2017年度 思考と技術と対話の学校

校長 森司 / 教頭 坂本有理(アーツカウンシル東京) / 教務主任 橋本誠 / スクールマネージャー 山本 謙(「言葉を紡ぐ」阿比留ひろみ(一般社団法人ノマドプロダクション) / 猪股敬香(春生堂)、関川歩(MT Bridge Limited) / 「体験を紡ぐ」坂田太郎(サイト・イン・レジデンス)、野崎美樹(SHOW LAB) / エディター 上條桂子、佐藤恵美 / 事務局 事務局 長井友美、米津いつか、八重樫典子、脇屋佐起子、和田真文(一般社団法人ノマドプロダクション)

Tokyo Art Research Lab (TARL) では数年に渡り、プロジェクトを推進する「事務局」を担う職能者の育成を実施しています。アートプロジェクトの現場では常にリーダー的人材は不足しているのが実情で、なかなか好転しません。それだけアートプロジェクトの現場の数が増えているということでしょう。ここ数年は、芸術祭など大規模なプロジェクトだけでも数十を超え、「アートツーリズム」という語に代表されるように、そのような場に訪れる人も増えています。現場を興す人たちと、その現場を享受し楽しむ人という構図が一定のレベルまで構築されたのでしょうか。そうなる下次に問われるのは、鑑賞体験の質かもしれません。高い質のサービスを求める鑑賞者側の声は高くなっていくでしょう。

私自身、つくり手側が受け手側に豊かな体験を提供する行為は、もっと重視されるべきだと実感した経験がありました。それはアートプロジェクトのリサーチで訪ねた父島ちちじまでのネイチャーガイドツアーでした。ガイドさんは、島の歴史と人の流れを地政学的に語り、植生についての特徴を示し、鮮やかに土地の記憶を紐解いていきました。ツアーは語りの魅力とあいまって、私たちの旅にワクワクする体験と充実した時間をもたらしました。そのとき考えたのは、新しくプロジェクトを実施することに執着せず、すでにある多くのプロジェクトの現場をガイドするアートナビゲーターこそ

必要なのではないだろうか、ということでした。アートプロジェクトの現場に有償でガイドする人が増えると、そのこと自体が雇用につながります。同時に、より豊かなアート体験が得られる人や、アートの必要性を感じる人も増えるでしょう。そうなれば未来は明るくなるのではないか。そう考え、それまでは企画できる(企てる)人を育てるためのコースのみだった「思考と技術と対話の学校」に「紡ぐ」というコースを加えることにしました。そのときイメージした受講生の対象は、企画主催者ではない立場から、アートプロジェクトを深く楽しむためのナビゲートができる人材です。

「紡ぐ」人のイメージは、マスメディアに広報をする役ではありません。表情や態度など対面での相手の反応を見ながら融通無碍ゆうずうむげ、自由自在に話を展開し、豊かなアート体験を提供する人です。アートの世界の魅力からアートの社会的役割の解説までを担う人。こうしたアートワールドを紡ぐ語り部が、たくさんのアート享受者を生み出したら、文化の側から経済を回す人材も多くなるかもしれません。さらには異なり(わからないこと)に対して、寛容な社会、失敗を厭わないチャレンジへのエネルギーも増えていくでしょう。それは決して夢物語とは思わないのです。今後も「思考と技術と対話の学校」では「企て」とともに「紡ぐ」人材を育てていけたらと思っています。

2019年3月

ブックリスト

「アートプロジェクトを紡ぐ」を深める本や文献を紹介。

1. アートプロジェクトをもっと知るために。

- 加治屋健司著
「地域に展開する日本のアートプロジェクト 歴史的背景とグローバルな文脈」『地域アート 美学／制度／日本』（堀之内出版、2016年、95〜134頁）
- 熊倉純子監修
『アートプロジェクト ― 芸術と共創する社会』（水曜社、2014年）
- 竹久侑著
『アートプロジェクトを考える』『現代アートの本当の見方』（フィルムアート社、2014年、120〜126頁）
- 藤浩志、AAF ネットワーク編
『地域を変えるソフトパワー―アートプロジェクトがつなぐ人の知恵、まちの経験』（書幻舎、2012年）
- 荻原康子、熊倉純子編
『社会とアートのえんむすび 1996-2000』（ドキュメント2000プロジェクト実行委員会、2001年）

2. 本書の「紡ぐ」実践者によるプロジェクトの数々。

- アサダワタル著
『想起の音楽表現・記憶・コミュニティ』（水曜社、2008年）

- 山出淳也著
『BERPU PROJECT 2005-2018』（KAO 法人BERPU PROJECT、2018年）
- 小川希編
『アートプロジェクトの悩み―現場のプロたちはいつも何に直面しているのか』（フィルムアート社、2016年）

- 影山裕樹著
『ローカルメディアのつくりかた：人と地域をつなぐ編集・デザイン・流通』（学芸出版社、2016年）

- 椿昇、多田智美・原田祐馬著
『小島島にみる日本の未来のつくり方：瀬戸内国際芸術祭 2013 小豆島 醬の郷+坂手港プロジェクト「観光から関係へ」ドキュメント』（誠文堂新光社、2014年）

- かじこ（小森真樹・蛇谷りえ・三宅航太郎）編
『かじこ：旅する場所の108日の記録』（かじこ、2013年）

3. Tokyo Art Research Labのウェブサイトで閲覧できる文献。

- 『思考と対話の学校基礎プログラム講義録』
（思考を深める／想像を広げる・2014年、2015年、2016年／仕事を知る・2014年、2015年、2016年）
- 熊倉純子監修
『続・日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990年→2012年「補遺」』（前編：2015年／後編：2016年）
- 小川希著
『アートプロジェクトの0123』（2010年）

編集後記

坂本有理

あるとき、本書に絵を寄せてくださった^{はずめまままひろ}蓮沼昌宏さんが、絵を描く過程で糸紡ぎ体験をしたときの話をしてくれました。タイミング、スピード、力加減がそろわないと長い糸にはならず、慣れるまでにたくさんの失敗を重ねたそうです。アートプロジェクトを紡ぐときも、内容や伝え方など絶妙なバランスが求められるものでしょう。また、糸になりきれなかった「糸らしきもの」たちの、均質ではない姿が印象的だったとのこと。アートプロジェクトを言葉や体験で紡ぎ出す前の状態と、蓮沼さんの話を重ねながら、可視化されていない価値あるものについて思いをめぐらせました。紡ぐこと、そして紡いだものをどのように編み、社会化していくのか。これらは「思考と対話の学校」にとって、引き続き大きなテーマとなるでしょう。本書では紹介しきれませんが、さまざまな実践に取り組みしました。『思考と対話の学校 2017 ANNUAL REPORT』もぜひご覧いただければと思います。最後になりますが、講師のみなさま、企画をともにつくりあげた一般社団法人ノマドプロジェクト、スクールマネージャーやエディターのみなさま、そして本書の制作にご協力いただいたみなさまに心より感謝し、編集後記とさせていただきます。

アートプロジェクトを紡ぐ

——伝える・ひらく・つなげるためのヒント集

2019年3月25日発行

著者	アサダワタル	多田智美
	荒田詩乃	長島 確
	小川 希	中田一会
	小高日香理	羽原康恵
	影山裕樹	藤 浩志
	加治屋健司	松田雅代
	川瀬一絵	三宅航太郎
	「コロカル」編集部	嘉原 妙
	笹川尚子	L PACK.
	佐藤 悠	森 司
	鈴木一郎太	坂本有理
	嶋田昌子	

編集 坂本有理 (アーツカウンシル東京)
佐藤恵美

デザイン 漆原悠一、梅崎彩世 (tento)

編集協力 浅尾円賀、坂本のどか、関川 歩

制作補助 濱田夏実、村方光沙子、佐藤満奈美

印刷 株式会社八紘美術

発行 アーツカウンシル東京
[公益財団法人東京都歴史文化財団]
〒102-0073
東京都千代田区九段北4丁目1-28
九段ファーストプレイス8階
TEL 03-6256-8435 / FAX 03-6256-8829
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>



Tokyo Art Research Lab (TARL) とは

アーツカウンシル東京の人材育成事業として、アートプロジェクトを実施するすべての人々に開かれ、ともに作りあげる学びのプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことによって、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。

※本書は「Tokyo Art Research Lab 思考と技術と対話の学校『言葉を紡ぐ』『体験を紡ぐ』」の連続講座をもとに制作しています。

© Wataru Asada, Shino Arata, Nozomu Ogawa, Hikari Odaka, Yuki Kageyama, Kenji Kajiya, Kazue Kawase, colocal, Shoko Sasakawa, Yu Sato, Ichirota Suzuki, Masako Shimada, Tomomi Tada, Kaku Nagashima, Kazue Nakata, Yasue Habara, Hiroshi Fuji, Masayo Matsuda, Kotaro Miyake, Tae Yoshihara, L PACK., Tsukasa Mori, Yuri Sakamoto

© Masahiro Hasunuma

ISBN 978-4-909894-01-4 C00070
Printed in Japan

